法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-29

EToS : 法政大学江戸東京研究センター年度報告書, vol.3

(出版者 / Publisher)
法政大学江戸東京研究センター
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
48
(発行年 / Year)
2020-02-28

法政大学

EToS

江戸東京研究センター

Hosei University Research Center for

Edo-Tokyo Studies

2019 vol.3

③

法政大学
HOSEI University

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
2-17-1 Fujimi Chiyoda-ku Tokyo, JAPAN

文部科学省補助金私立大学研究ブランディング事業
「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」

目次

マニフェスト 3

江戸東京研究センター（EToS）の1年の活動を振り返って 4
江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授　横山泰子

4つの研究プロジェクト

① 水都ー基層構造 6

② 江戸東京のユニークさ 8

③ テクノロジーとアート 10

④ 都市東京の近未来 12

2019 年度事業報告

シンポジウム・研究会 14

市民講座 40

学内外・地域活動 42

著書・論文・その他 44

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature, history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally and spatially, and derives from them a method and theory for constructing sustainable global communities. It is a learning resesrch base where that wisdom is nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of global communities.

江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授
横山 泰子

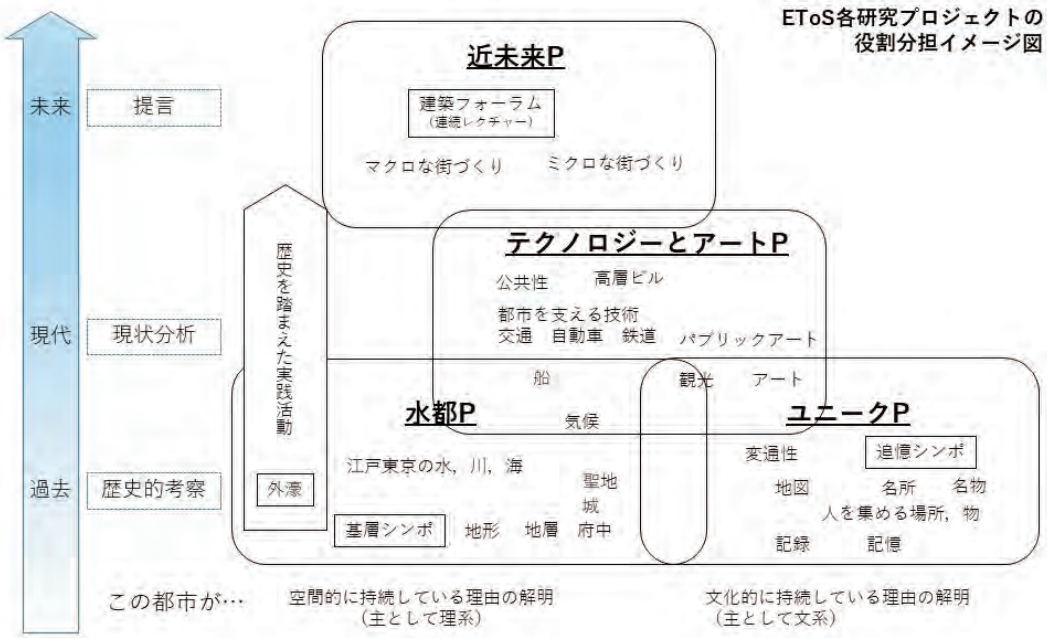
「私立大学研究ブランディング事業」として発足した江戸東京研究センターは、２０１９年２月、文部科学省の計画打ち切りという深刻な事態に直面した。文部科学省からの支援が２０１９年度で終了することが決定してから、江戸東京研究センターの今後について、学内で議論を繰り返した。その結果、予算配分や研究内容を見直し、当初計画通り２０２１年度まで事業を継続することが認められた。江戸東京研究センターの設立からの実績に対し、学内外から一定の評価と期待の証ととらえている。厳しい局面において、御理解とご協力を下さいました皆様に心より御礼申し上げる。
現実問題として、全体予算の削減により、残念ながら一部の活動の継続を断念せざるを得なくなった。事業計画も抜本的に見直しつつ、２０１９年度も
１） センター全体で実施する研究ブランディング事業
２） 各研究プロジェクトが勧める研究事業　を組み合わせながら行う

という基本的な路線を変えることなく、調査研究活動を行っている。

１）のセンター全体で実施する研究ブランディング事業としては、今年度は既に「磯崎新　特別講演会　東京を首都たりうるか」「シンポジウム　江戸東京の東西南北」を実施した。２０２０年１月にはヴェネチア・フォスカリ大学で国際シンポジウム「Tokyo and Venice as Cities on Water」が予定されている。江戸東京研究センターのコアメンバーがヴェネチアに行き、２日間にわたって外国人研究者とともに文理融合の研究集会を行う。
昨年度行ったシンポジウム等の書籍化もすすめている。２０１８年４月に行った「日本問答　江戸問答」は、内容を充実させ岩波書店より刊行する予定である。２０１８年７月に開催した「風土（FUDO）から江戸東京へ」は法政大学出版局、２０１９年３月に開催した「追憶のなかの江戸」は文学通信より刊行予定で、いずれも出版にむけた詰めの作業をしている。
一般向け、社会人向けの江戸東京講座として、神田明神において江戸東京文化講座を連続で開講した。学内でも履修証明プログラム「江戸東京を学ぶ」を企画し、授業運営を行った。

法政大学の３つのキャンパスの立地を生かした「キャンパス連携事業」としては、今年度は小金井キャンパスで「講演会＋座談会　江戸の天文学」を開催した。
市民との連携及び企業などの学外諸機関との連携は今年度も積極的に行った。エコ地域デザイン研究センター、外濠市民塾、そして周辺の大学、学校、企業の集まりである「外濠再生懇談会」が中心になって「外濠の再生を考えるシンポジウム」を開催する等、地道な活動を積み重ねてきた。２０１９年9月１７日には、本学田中優子総長が、松本洋一郎・東京理科大学学長、福原紀彦・中央大学学長との連名で、2019 年 9 月 17 日に小池百合子・東京都知事に対し、外濠・日本橋川の水質浄化と玉川上水・分水網の保全再生に関する提言を提出した。

２） 各研究プロジェクトが進める研究事業
についてはプロジェクトリーダーを中心に個々に研究会の開催や学会発表等をすすめている。メンバーの興味や関心が重なりあうテーマについては共同で、役割分担を決めるべきところは決めながら行っている。現状でのプロジェクトの役割は以下のとおりであるが、これまでの成果を総括し、どういった方向で研究をすすめ、どこに重点を置くかを考える会を２０２０年２月に予定している。



1

Project 1

水都―基層構造

テリトーリオと文化的景観

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー　高村　雅彦

このプロジェクトでは、江戸東京が長く生き続けるその理由と意味を解き明かすために、これまであまり注目されてこなかった古代・中世から綿々とつながる大地や自然と結びついた都市と地域の基層構造の解明を水との関係に着目し追求しています。

前年度は水都の基層構造の研究を深めるため、江戸東京における多様な水の空間の類型化について、具体的な対象に焦点を当てながら明らかにすることが目標でした。そこで、令和元年・平成 31 年度は、都市と地域の領域、いわゆるテリトーリオと文化的景観に焦点をあてて研究を進めました。これまでの研究で、江戸東京のいわゆる中心部だけではなく、対象の範囲をより広くとらえて考察しなければならないということが明らかになりました。江戸市域に限定せずに、その繁栄を支えた後背地や近郊農村をつなげて分析する方法を用いて、江戸東京の全体を水と地域形成の視点から再読することを目指しました。

その成果の一部は、テリトーリオ研究会「重要文化的景観とテリトーリオ」と題して、2019 年 11 月 27 日法政大学にて公表し、今後の方向とその有効性について議論しました。また、査読付論文 2 本を含む合計 30 編以上の論文、学会・シンポジウム発表を行い、昨年度までの成果を整理して、積極的に発表しました。さらに、江戸の基層シンポジウム「古代・中世の府中から武蔵国を探る」、水都交流セミナー「エクハルト・ハーン先生を囲んで／ベルリン近郊のエコシティと東京のグリーンインフラ」、ローザ・カーロリ教授講演会「江戸・東京における佃島の誕生と発展」、玉川プロジェクト「御嶽山で語る畠山重忠 ～ 父と娘 玉川が紡ぐ魂の邂逅～」、同「玉川の語源を探る夕べ」、外濠市民塾「地域から外濠の再生を考える」、同「外濠浚渫工事見学会」を開催し、広く社会に対して水都の果たす役割を発信しました。

令和 2 年には、江戸東京を最も特徴づける水都としての様々な視点を世界の都市に投影し比較研究することを主な計画としています。これまでの成果を総括的にまとめつつ、江戸東京の独自性を強調するため、海外の都市との比較を重点的におこない、現代の東京に見る固有性を世界に向けて発信するベースづくりをおこないます。とくに、水との関係に見る都市性の在り方を広く海外と比較研究し、学術交流を図りつつ、江戸東京研究センターの情報を発信し、世界のさまざまな国や地域に対する役割を明確にしていく予定です。

具体的には、2020 年 1 月 13 日、14 日の二日間、江戸東京研究センターとイタリアのカ・フォスカーリ大学との共催で国際シンポジウム「水の都市としての東京とヴェネツィア―過去の記憶と未来の展望」を開催します。また、2020 年 6 月 20 日には、次にアジアを対象として日中韓を中心とする国際シンポジウム「都市・自然・人間」を法政大学で開催します。日

本の都市史学会、韓国都市史学会、上海社会科学院を中心とする「東アジア都市史学会」と江戸東京研究センターが協同し、ここではアジアの都市との比較研究を行うことが目的です。こうして、江戸東京を基軸に、西欧世界とアジア世界との比較論を構築することが令和 2 年の大きな目標となります。

東都近郊図(1830 年、国立国会図書館デジタルアーカイブより)

Photo by Hiroshi Aoki

高村雅彦

1964 年生まれ。専門はアジア都市史・建築史。法政大学大学院博士課程修了。博士（工学）。前田工学賞、建築史学会賞を受賞。編著に『タイの水辺都市　天使の都を中心に（水と<まち>の物語）法政大学出版局（2011）、『中国江南の都市とくらし　水のまちの環境形成』山川出版社（2000）などがある。

② Project2 江戸東京のユニークさ

江戸東京の名所・景観研究

江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授、プロジェクトリーダー　横山　泰子

「江戸東京のユニークさ」の研究活動は、昨年度に引き続き、「江戸東京の名所・景観」を研究テーマとしながら、昨年度の研究会等で出されたキーワード「追憶」「武都」「帝都」を組み込んだかたちで行った。今年度の調査研究活動は、主に以下の三つに分けられる。

1　他の研究チームならびに学内外の研究者と協力しながら行う研究活動
　「追憶のなかの江戸」
　「東京と江戸をつなぐ～風景と場所」（法政大学地理学会と共催）
　「近代東京と「スポーツの都」」
　「美術という見世物　江戸から東京へ」（テクノロジーとアートと共催）
　「江戸の天文学　天文学の場／江戸東京」（法政大学理工学部創生科学科と共催）
　「歌舞伎の江戸東京　都市空間と劇場街」（歌舞伎学会と共催）
　「東京の新名所　史蹟と銭湯」
2　江戸東京の名所の変遷を示す地図作成
3　昨年度の研究成果の書籍化

１について　江戸東京のユニークさを考えるうえで重要な「名所」の研究は昨年度から継続しているが、東京は変化が激しい都市であるがゆえに「名所」の変化も甚だしい。かつての名所が失われ、場所は残っていても景色が変貌していることが多い。東京の名所は常に追憶のなかで語られることから「追憶」というキーワードが導き出され、企画されたのがシンポジウム「追憶のなかの江戸」である。近代化とともに東京が江戸から継承した様々な文化資源をもとにスポーツの都、美術の都、演劇の都として様変わりしていった過程をとりあげ、東京の各地域のユニークさを考える研究会を企画した（既に実施した各研究会の内容については、開催報告のページを参照いただきたい）。今年度は３月に「東京の新名所　史蹟と銭湯」を予定している。

全体的に研究費を削減せざるをえなかったため、ユニークチームの研究会は、可能な限り学内の研究者に発表を依頼し、学内の他部局との協力による共催形式をとるなどの工夫を行った。研究費をできるかぎり節約するためではあったが、結果的に法政大学内で多方面の方々に呼びかけて交渉する過程で、学内の人間関係を構築するきっかけをつくることができたのは収穫であった。今年度は学内で江戸東京に関する研究をしている人、ブランディング事業の意義を理解してくれる人を見出すことにエネルギーを注ぐことになり、学部や学科の枠をこえた協力関係を作ることができた。昨年度までの江戸東京研究センターのブランディング事業は、もっぱら学外を視野に入れて行っており、学内でのコミュニケーションがやや不足しがちであった。予算減という非常事態ではあったが、学内で人材を探すことではからずも

インナーブランディングに寄与できた。法政大学は総合大学であり、「江戸東京」というキーワードで周囲を見渡すと多くの協力者を得ることが可能である。そのことが、今年度の貴重な発見であった。

2について　江戸東京の名所の基礎研究チームとして、「ユニークさ」のメンバーである米家志乃布教授と福井恒明教授を中心に「江戸東京アトラス（地図）プロジェクト」が進行している。名所の変遷から江戸東京の基層を探ることをねらいとし、「歌川広重『名所江戸百景』マップ」「『新撰東京名所図会』マップ」「東京の銅像マップ」を制作中である。資料に示された場所を地図に落とし込み、名所の変遷を空間的に把握できるようにする作業は、地道で時間がかかるため、昨年度および今年度は内部関係者による意見交換会やワークショップをはさみながら、一般公開をみすえた作業に取り組んでいる。実際の地図作成には数多くの本学学生が関与しており、独自の組織運営が必要な段階に入った。次年度からは「ユニークさ」の枠から独立させ、効率的な運営をすることとなった。文理融合的な基礎研究の成果を期待したい。

3について　成果の出し方や広報については、ウエブサイト上で情報公開を行うようこころがけてきたが、経費をできるだけ削減するために、さらなる工夫をしなければならない。出版社と交渉してできる限り一般書籍として刊行する努力をするほか、学会との連携企画については学会誌に成果を載せるなどの方法が考えられる。歌舞伎学会との共催「歌舞伎と江戸東京」では、都市における盛り場の空間的な意味を学際的に検討した試みであり、学会誌に記録を掲載することが決まっている。他の研究機関と協力し、互いの研究力を高めながら、無理のないかたちで成果を出す可能性を今後はよりさぐるべきであろう。

今年度まで江戸東京研究センター長と「江戸東京のユニークさ」のプロジェクトリーダーを兼務していましたが、任期満了が近づいてきました。ご協力下さった皆様に心から感謝申し上げるとともに、引き続き江戸東京研究センターの活動に御理解ご協力いただけますよう、お願い申し上げます。

横山泰子

1965年生まれ。専門は日本近世・近代の怪談文化。国際基督教大学大学院博士課程修了。博士（学術）。日本古典分学会賞受賞を受賞した『江戸東京の怪談文化の成立と変遷—一九世紀を中心に—』風間書房（1997）のほか、主な著書に「綺堂は語る、半七は走る」教育出版（2002）、『妖怪手品の時代』青弓社（2012）などがある。

③

Project3
テクノロジーとアート

都市文化とアート、それを支えるテクノロジー

法政大学経済学部教授、プロジェクトリーダー　山本　真鳥

今年度年頭から安孫子信氏と交代して、山本真鳥がリーダーの任にあたることとなった。19 年度となって、急に予算が縮小したために困難が伴っていたが、滞りなく実施する工夫をした。当初目標とした 5 回の研究会は、4 回まで具体化している。またシンポジウムも 1 回行う計画となった。18 年度は主に風土といった文化論を中心に、ファイン・アートや文学、テクノロジーに関するシンポジウムと広い活動領域を探査していたが、19 年度は、どちらかというとアートの境界領域を探るものとなり、そこにアート活動を支えるテクノロジーの進化が見え隠れしている。

第 1 回研究会は法政大学大学院政策創造研究科教授増淵敏之氏を講師に迎え、「コンテンツツーリズムと東京」をボアソナードタワー25 階研究所会議室 5 にて、7 月 18 日（木）18:00〜20:00 の日程で開催した。コンテンツツーリズムとは、文学・映画・漫画・アニメ・テレビドラマなどの舞台となった土地を訪れる観光行動のことである。これまでに研究の系譜や現状を紹介しつつ、コンテンツ作品の中に描かれた「東京」を具体的に検討し、なぜ、その場所を巡る観光行動が生じたのかについて論じた。また現在のコンテンツツーリズム（アニメの聖地巡礼）の運動が生じる起因になった背景写真のデジタル化というテクノロジーの進展という点についても触れていただいた。

第 2 回は、「江戸東京の「ユニークさ」」との共催により、横浜国立大学教授・本学江戸東京研究センター客員研究員の川添裕氏と静岡県立美術館館長・東京大学名誉教授の木下直之氏をお迎えし「美術という見世物〜江戸から東京へ〜」を大内山校舎 Y406 教室にて、9 月 28 日（土）14:00〜17:00 に開催した。江戸の盛り場で庶民娯楽であった見世物小屋だが、明治以降、西洋から美術が輸入されると、まずはここで「美術」が展示されたのであった。やがて美術館や美術学校が設立され、新しい「美術の枠組」が導入されていくが、定着していくまでにはさまざまな葛藤があった。その過程の主な舞台は東京であった。

第 3 回は、早稲田大学人間科学学術院助教山越英嗣氏を発表者に、元関西学院大学教授・神奈川大学アジア研究センター客員研究員の関根康正氏をコメンテータにお迎えし「東京首都圏のグラフィティとストリートアート」を、11 月 21 日（木）18:00〜20:00 に大内山校舎 8 階 Y805 教室にて開催した。グラフィティ（およびストリートアート）はニューヨークで始まり、公共物に無断でゲリラ的に、飾り文字や絵をスプレー缶を用いて描くアート活動である。移民の若者からやがて白人の若者の間にも、さらに世界中の都市へと広まっていった。日本では、横浜桜木町に「グラフィティの聖地」と呼ばれる一角があったが、市役所が管理強化を行い、現在では落書き禁止の看板のみの灰色空間となってしまった。国家や自治体の

管理主義とどう対峙するかはグラフィティ活動の課題である。現代都市文化におけるグラフィティのもつ可能性と意義についての議論がなされた。

今後の計画であるが、第 4 回は、法政大学経営学部教授岡本慶子氏を発表者にお迎えし、「東京の京友禅」を、1 月 25 日（土）13:00〜15:00 に開催する予定となっている。岡本氏はテキスタイルデザイナーや営業職などの経験を生かし、アカデミックな研究を行っているキモノの専門家である。もともと手描きだった京友禅は、明治以降、新しい染料やシルクスクリーンなどのテクノロジーが入ってくることで大きく変容し、あらたにその流通の中心としての東京が出現する。大衆化のモメントと高級品化の両極の間を、時代の情勢や流行の中で揺れ動くが、その一方で、海外にはアートとして高級品が流出した。

また、シンポジウム「パブリックアートと東京」を、3 月 1 日（日）13:00〜17:30 に富士見ゲート 2 階　G201 教室にて、開催することが決まっている。都市とアートという結びつきで考えると、パブリックアートはいかにも都市の公共空間に欠かせない都市文化の中心でもあり、またその背景でもある。公共空間をどのようにデザインし、人の流れを形作り、人々を結びつけていくのか。近代都市に欠かせない存在としてのパブリックアートが東京でいかなる姿を見せ、いかなる存在であるべきか、といった問題意識に始まっている。アートディレクターとして高名なアートフロントの北川フラム氏の基調講演に加え、パブリックアート制作者の彫刻家高田洋一氏、研究者として東京造形大学准教授藤井匡氏、立川でパブリックアートと音楽のコラボ事業を行っている法政大学キャリアデザイン学部教授荒川裕子氏に講演を行っていただき、その後ディスカッションを行うことを計画している。

なお、昨年度 3 月 30 日に開催されたシンポジウム「テクノロジーと東京」の報告書を、限られた予算の中であるが出版する計画である。現在原稿はほとんどが集まり、編集作業は 7 割程度終了した。年度内に十分出版可能と考えている。

山本真鳥

東京大学大学院社会学研究科（文化人類学専攻）博士後期課程単位取得満期退学。日本学術振興会奨励研究員を経て、1984 年より法政大学経済学部助教授。1990 年より同教授。文学博士。専門はオセアニア地域の文化人類学研究。論文「オセアニア芸術とは何か」（『経済志林』第 86 巻 第 3・4 合併号, 2019 年）の他，主な著書に，『グローバル化する互酬性―拡大するサモア社会と首長制―』（弘文堂, 2018 年），『はじめて学ぶ文化人類学―人物・古典・名著からの誘い』（岸上伸啓編, ミネルヴァ書房，2018 年）などがある。

4

Project4

都市東京の近未来

都市の問題確認と東京近未来研究の位置づけ

法政大学デザイン工学部教授、建築家、プロジェクトリーダー　北山 恒

文科省からの助成金がストップされ、今年度当初予算ではプロジェクト予算は0とされた。プロジェクトというのは運動なので、活動資金が無くては走ることは困難である。これまで毎月プロジェクトの定例会議を開き、隔月には委員メンバーによって公開の研究会を開催してきた。熱心に参加いただいていたのは多くは学外の委員で、東京が抱える現在の問題群の検証と、その問題に対応して試みられているいくつかのプロジェクトの紹介など、活発な報告があった。しかし、この定例会議はプロジェクトを企画することを中心とした会議であったため、本年度5月以降開催は中断している。

昨年度までは、当初提出した「各年度の年次目標及び実施計画」にもとづいてプロジェクトを進行させていた。今年度は、年度初めに開催した「磯崎新講演会」を起点に関連する国際シンポジウムを企画する予定であった。今年度の事業計画では、「国際的研究ネットワークの構築。プロジェクトサイトの策定。行政とまちづくりの連携研究を行う。」ということを目標としていたが、建築学科の教育プログラムと共催の形を取ってプロジェクトを進行させることにした。

ひとつは「建築フォーラム」という連続公開講座で委員の北山と渡辺が主に担当した。「都市という表現」というタイトルで全7回の連続レクチャーである。別紙で詳細に報告するが、そこでは「磯崎新講演会」で磯崎が提示した壮大な都市の仮説に対して、より具体的な政治制度の問題や都市の公共性が語られた。さらに、現代東京の問題群として、1.都市コンテクストの漂白、2.都市空間の均質化、3.問題領域の二極化、が報告された。もうひとつは、大学院に設ける「デザインスタジオ」のなかで行う、旧品川宿のまちづくりプロジェクトである。委員の北山と仲が担当した。このプロジェクトは年度内に品川区の行政担当者にプレゼンテーションをする予定である。

本プロジェクトでは当初より、現在の東京の問題群の諸相のなかで、生活空間としての住宅地域に注目している。東京の都心部は「短期的利益の最大化」を目指す不動産商品で埋め尽くされ、アジア諸都市に出現している「ジェネリック・シティ」に近似する様相を示している。そこでおこなわれる大型開発では、土地の記憶を消去して新たなストーリーを書き込むテーマパーク型の開発が行われている。この経済活動を中心とする都市の問題は20世紀末に市場経済に都市運営を委ねる文明の問題である。

東京の都市固有の都市問題は、コンテクストが濃密に残る既成市街地の住宅地域のなかにあり、そこに東京の近未来を探ろうと考えている。東京は都心周縁部に円環状に木造密集市街

地が存在する。この地域の存在が最大の都市問題であるのだが、同時にこの地域をどのように更新するのかということが未来の可能性であると考える。この更新の手法を検証している。1.地域の特性を読み取る方法、2.民主的集合を描く方法、3.多層に存在する問題群を解く突出した回答を探るものである。

１．【多層地域評価マップ】

多層地域評価マップとは都市エレメントを地図に落としたものを制作し、それを重ね合わせることで特性を浮かび上がらせるものである。木造密集市街地では防災（火災）、未接道宅地、空家・空地の要件が大きく反映することがわかる。重ね合わせる都市エレメントによって、街のイメージやキャラクターをつくるものが何なのか特定することができる。

２．【パタン・ランゲージ】

パタン・ランゲージとはこうあってほしいと思う地域や場所の事柄を誰でもわかる空間言語として表現するものである。写真のコラージュや図面、イメージを現す言葉などを集めたポスターのようなランゲージをつくることから始まる。相反するランゲージも容認される。このランゲージを組み合わせたカスケードが空間として翻訳される。誰でもが空間つくりに参加できる民主的なプラットフォームができる。

３．【建築的仮説提示】

地域の問題群は複雑で多様な様相を持っている。時間のなかで固定した空間として提案される建築物は問題群に暫時的回答を与えるだけでなく未来の在り方まで方向付けるものとなる。民主的につくられる凡庸な回答ではなく、誰もが共感できる方向性をもった仮説提示が求められる。このように突出する回答をつくるのが建築家的能力であり、その回答は多様に存在することが特徴である。

EToS の「都市東京の近未来」研究では、木造密集市街地のなかの空地・空家となっている未接道宅地を共有の空地とする「ヴォイドインフラ」という提案を行っている。このヴォイドインフラは共有地（コモンズ）として設定しており、近隣の共同体を支えるオープンスペースである。同時に井水を躯体内に循環させる防火壁を想定しており、日常的には空地への輻射熱源となり、火災時には延焼を防ぐドレンチャーとなるものである。

北山　恒

1950 年生まれ。建築家、専門は都市理論。横浜国立大学大学院修了。代表作「専属の連結住棟」「融点時の連結住棟」で日本建築学会賞、作品選奨受賞など。著書に『都市のエージェントは誰なのか』TOTO 出版（2015）、『モダニズムの臨界』NTT 出版(2017)、共著に『TOKYO METABOLIZING』TOTO 出版（2010）などがある。

シンポジウム

「追憶のなかの江戸～江戸は人びとの記憶のなかでどのような都市として再構成されたのか」

開催日：2019 年 2 月 20，21 日
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　富士見ゲート G602

韓国の研究者も含め、2 日間で 12 名の研究発表が行われ、江戸時代の中期から昭和まで、江戸という都市の歴史・地理、またさまざまな風俗などを回顧する言説がどのように行われたのかが多角的に論じられました。

当日は 2 日間でのべ 135 名の参加を得て、質疑も活発に行われました。

これによって江戸が都市として成熟してゆく過程で、住人たちにその歴史に対する認識が芽ばえ、その固有性への意識が高まるなかで、さまざまな角度から過去の江戸をふり返る言辞が生みだされたことが確認されました。作者・作家、文人らが文献や記憶・伝承を駆使し、古跡や遺物をたどることで、過去の江戸の地理やそこに生きた人物の足跡、諸事象の故事来歴を事細かに探った過程やその結果を書き残し、ときにさらにそれを文芸作品化していったさまが浮かびあがってきました。

多かれ少なかれそこにある程度共通してみえたことは、江戸という都市の空間や、そこから輩出された人物や生みだされた文化などの歴史について、（事実性・正確さをめざす批判的な検討という意味では、作者／作家によって差異ないし限界はあるとしても）、真摯に調査・探究し、あるいは記録しようとする姿勢であったのではないでしょうか。

シンポジウム終了後に前所長の陣内秀信氏より、（都市の構造や建築がそのまま残る欧州の都市と比べて）「火災や震災でモノが失われることが多かった江戸東京では、こうして都市の記憶が紡がれ、共有されていったことがよくわかった」という感想が寄せられました。こうした営為による都市のアイデンティティ形成そのものが、江戸東京の、あるいは日本の都市の特徴といえるかもしれません。

またその考究の対象には、都市のモニュメントとなるような建築・構造物や隅田川のような象徴的な地形もあるいっぽうで、小さな地名の一つひとつ、身分階層や活躍した分野の雅俗を問わない先人たち、さまざまな名物や物売りにまで及んでいたことも注目されます。国内の他の都市では似たようなことがあるのか、時代を超えた比較、欧州や東アジアの首都などとの比較で考えてみたい事象です。江戸東京の「ユニークさ」は、こんなところにもかいま見えてきました。

本シンポジウムの成果は、2019 年度中に刊行する予定です。

【報告者とテーマ】

2 月 20 日（水）

真島　望（成城大学）「菊岡沾凉著『本朝世事談綺』考－享保期江戸の風俗考証－」

小林　ふみ子（法政大学）「大田南畝と武家故実家瀬名貞雄の考証」

有澤　知世（国文学研究資料館）「山東京伝と元禄歌舞伎」

神田　正行（明治大学）「馬琴の江戸地理考証」

金　美眞（ソウル女子大学）「近世期の日本人と朝鮮人の目で見た‹江戸像›」

2 月 21 日（木）

阿美古　理恵（国際浮世絵学会事務局）「考証随筆のなかの師宣と一蝶」

佐藤　悟（実践女子大学）「千年飴をめぐる諸問題－柳亭種彦の考証随筆－」

中丸　宣明（法政大学）「明治における考証随筆」

合山　林太郎（慶應義塾大学）「近世・近代の漢詩文における江戸の‹名所›と‹風景›」

出口　智之（東京大学）「近世絵入り文芸の残照－近代口絵・挿絵に残る江戸－」

大塚　美保（聖心女子大学）「鴎外歴史叙述に見る‹江戸›の座標系」

関口　雄士(法政大学)「石川淳の‹江戸留学›」

シンポジウム

「佐原『江戸優り』フォーラム」

開催日：2019 年 3 月 9 日（土）
場　所：与倉屋大土蔵(千葉県香取市佐原)

北総四都市江戸紀行活用協議会との共催により「佐原『江戸優り』フォーラム」が千葉県香取市佐原の与倉屋大土蔵にて開催されました。参加者は約 200 名にのぼり、法政大学総長、江戸東京研究センター副センター長をはじめ、地元の郷土史研究家や大学の研究者などが登壇し、江戸と佐原のつながり、佐原の住民自治や佐原の未来などについて講演やパネルディスカッションを行いました。

１　「江戸東京研究センター紹介」福井恒明／江戸東京研究センター副センター長，エコ地域デザイン研究センター長
江戸東京研究センターの概要や研究活動内容について紹介がありました。
２　「『江戸はネットワーク』再論」田中優子／法政大学総長
江戸時代の水運、河岸の成り立ち、さらに水路流通の拠点であった佐原の特性にスポットを当て、流通革命がもたらす「人」や「モノ」のネットワークが文化や技術の革新を生んでいた江戸時代の姿を、様々な図像資料を基に実証的に考察しました。
３　リレー講義「近世在方町佐原と伊能忠敬」酒井右二／伊能忠敬翁顕彰会
近世の佐原の街の様子や、近在だけでなく近江など遠くからの入込商人も柔軟に受け入れていた佐原の住民組織体の形成、さらにその住民自治の礎をつくった伊能忠敬について、当時の地図や資料を具体的に提示しながら考察しました。
４　リレー講義「佐原の観光資源と住民自治」小笠原永隆／帝京大学准教授
佐原の観光資源と魅力は、重層的な歴史文化の蓄積のみならず、近世から続く住民自治の特性が現在も受け継がれているためであるという考察が提示されました。
５　パネルディスカッション「佐原の現在と未来」
コーディネーター：小島聡（法政大学人間環境学部教授）
パネリスト：福井恒明（前出）酒井右二（前出）
コメンテーター：田中優子（前出）
基調講演やリレー講義で取り上げられた近世から現代にかけての佐原の姿をふまえた上で、これからの佐原の在り方について活発な意見交換が行われました。
「佐原と水の関係を水都という視点で今後強調していってはどうか。」「佐原の魅力は来るたびに少しずつ変わり続けていることである。」「佐原らしさを失わずに変わり続けるために守るべきものをどう定義していくべきか、祭りに象徴される強固な住民自治の精神がその役割を担っていくのではないか。」「今後の日本が直面する地方自治の危機を乗り越えるヒントが佐原の自治の形にあるのではないか」「『変化しながら持続する自治力』を持つ地域としてこれからの日本のモデルになってほしい」といった意見が出されました。

「伊東建築塾／子ども建築塾」公開発表会

開催日：2019 年 3 月 16 日(土)
場　所：法政大学外濠校舎 S505 教室

「伊東建築塾／子ども建築塾」の発表会が江戸東京研究センターとの共催として開催されました。

「子ども建築塾」は建築家・伊東豊雄が塾長を務める伊東建築塾が，主に小学校高学年を対象に開設しているものです。2018 年度後期は「みんなの川のまちをつくろう！」のテーマのもと，恵比寿のまちなかを流れる「渋谷川」の一角を舞台とし，川と建物のつながりや，まちを訪れる多様な人々を意識しながら「楽しいまち」を設計しました。

今回の発表会では一年間の集大成として，子どもたちが模型やプレゼンボードを使って自分たちが作ったまちの姿を発表し，伊東建築塾の講師の方々及び江戸東京研究センターの陣内秀信特任教授が講評を行いました。たくさんの斬新で楽しいアイデアが，カラフルな立体模型やプレゼンボードで紹介され，参加者からは感嘆の声が上がりました。

陣内秀信特任教授からは，海外の都市における水辺と人とのつながりや，江戸時代の渋谷川の景観などにも言及した講評がなされました。

講師：アストリッド　クライン氏
クライン　ダイサム　アーキテクツ代表。共に RCA を修了したマーク・ダイサムと 1991 年に設立。主な作品に「代官山 T-SITE」、「GOOGLE TOKYO OFFICE」、「GINZA PLACE」など。www.klein-dytham.com

講師：太田浩史氏
1968 年東京生まれ。1993 年東京大学大学院建築学専攻修士課程修了。ヌーブ代表。東京ピクニッククラブ共同主宰。博士（工学）。主な作品に「PopulouSCAPE」、「久が原のゲストハウス」、「矢吹町第一区自治会館」など。

講師：陣内秀信
法政大学特任教授。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、サントリー学芸賞、地中海学会賞、イタリア共和国功労勲章、パルマ「水の書物」国際賞、ローマ大学名誉学士号、わるでーにゃ建築賞 2008 など受賞

江戸の基層シンポジウム

「古代・中世の府中から武蔵国を探る」開催報告

開催日：2019 年 3 月 23 日（土）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス富士見ゲート G201 教室

はじめに、法政大学江戸東京研究センター（EToS）の横山泰子センター長より開催挨拶がありました。江戸の基層シンポジウムは、昨年、センター設立早々の時期に「水都ー基層構造」プロジェクトの主催で開催されており今回が 2 回目となることなどが紹介されました。

引き続き当センター客員研究員の神谷博から趣旨説明がありました。今回は武蔵国の国府としての府中に焦点を当て、府中市から二人の講師を招いて実施し，古代につくられた東山道武蔵路と府中の関係や水系構造と社会構造を合わせて議論していきたいという狙いについて説明がありました。

講演の 1 つめとして、府中市ふるさと文化財課課長の江口桂氏より「古代武蔵国府とその周辺」というタイトルでお話を頂きました。江口氏の講演の目指すところは、「古代武蔵国の国府はいつ、どのように成立し、地域の中でどのような役割を果たし、それがどう変わっていったのか、考古学の立場から検討する」
とされ、律令制の変質とともに、公の地方官衙としての国府から、在地社会の中で維持管理・運営できる地域の実態に即した国府への変容が表れている、とまとめられました。

2 つめの講演は、府中市郷土の森博物館館長の小野一之氏より「江戸の基層としての中世武蔵府中－祭礼・古戦場・歌枕－」と題してお話しいただきました。はじめに中世の武蔵府中を概観したうえで、江戸名所図会の歴史的世界、武蔵総社の祭礼、分倍河原の古戦場、歌枕としての武蔵野・多摩川、と話を進め、おわりに武蔵国の古層として「浅草寺縁起」説話に触れ、武蔵国府の外港は品川か浅草か、という興味深い投げかけがなされました。

次に，二つの講演を踏まえ、パネルディスカッションに移りました。パネリストとして、講演者の江口氏、小野氏に加え、法政大学江戸東京研究センターから陣内秀信特任教授、根崎光男教授、神谷博兼任講師が加わり、コーディネーターとして高村雅彦教授が進行役となり活発な意見交換が行われました。

最後に、法政大学エコ地域デザイン研究センターの福井恒明センター長より挨拶があり、盛会のうちに閉会しました

ワークショップ

「テクノロジーと東京」

開催日：2019 年 3 月 30 日（土）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー25 階 研究所会議室 5

本ワークショップは、2018 年 11 月 24 日・25 日に行われたシンポジウム「アートと東京」「文学と東京」を受け、「交通」「建築」「テクノロジー」の 3 つのパネルを設け、東京とテクノロジーの関係を通して東京という都市がいかなる意味を持つか、が検討された。
各報告の概要は以下の通りであった。

1. パネル 1≪交通≫
1.1. 陣内秀信（法政大学）／「交通体系の変化と東京の都市構造の変容」
東京が交通の形態に依存しながらいかに発展し、都市の構造を変容させてきたかが、陸上交通、海上交通、鉄道の展開と地形や都市機能の変化に注目してこうさつされるとともに、それぞれの地形の特徴や土地の持つ役割が交通のあり方に与える影響が総合的に検討された。
1.2. 岩佐明彦（法政大学）／「効率の最大化によって変質する都市空間」
新潟県の事例に基づき、「大量動員、大量消費」という特徴を持つ現代の日本において「郊外」がどのように形成されているかを検討するとともに、「インドア郊外」の概念を用いて車依存、郊外化が進む地方都市では「インドア郊外圏域」が主たる公共圏となりうる可能性のあることが指摘された。
1.3. 鈴木勇一郎（立教大学）／「明治東京の電鉄と社寺参詣」
「電鉄は発展途上の技術」、「社寺参詣と密接に関係」、「市街鉄道と電鉄は未分化」という 3 つの観点から分析することで初期電鉄の特徴を明らかにするとともに、市内と市外を直通する路線計画が多数存在したこと、各種の計画の中で「郊外」と「参詣地」が重要な役割を果たしていたことが示された。

2. パネル 2≪建築≫
2.1. 北山恒（法政大学）／「柔らかい都市のテクノロジー」
保留床を担保に資金を確保して開発を行う都市ではなく、コミュニティを形成するための街を作る方法を検討し、個人と共同体が自然から分離される「都市の離陸」、個人と共同体、自然がそれぞれ分離する「超資本主義の離陸」の状態からそれぞれの要素が一体化する「着陸」することの重要さを通し、東京の近未来の姿のあり方が考察された。
2.2. 高村雅彦（法政大学）／「奪われる自由と想像される空間」
「発展の歴史」と「衰退の歴史」あるいは「対抗」をどう捉えるか、東京の独自性がテクノロジーの中でどのように捉えられるか、といった視点から、テクノロジーをよりよく用いるためには感性も重要であること、テクノロジーを通して都市・建築・文芸・アートが相互に作用し、そのすべてを受容できるのが東京であることが指摘された。

2.3. 岩井桃子（横浜国立大学）／まちに眠るテクノロジーの記憶を探る
街や風景の記憶を芸術家や作家の力で再現させる試みや街中でのパフォーマンスが都市の中での偶然性の発見をもたらすことなどが、報告者が実際に取り組んだ事例に基づいて紹介されるとともに、2019 年 2 月に法政大学で行われた「55・58 フェアウェル Days 55・58 年館の＜最終講義＞」での取り組みが報告された。

3. パネル 3≪テクノロジー≫
3.1. 白石さや（岡崎女子大学／東京大学）／「人間とテクノロジーのインタラクションンをデザインする：シリコンバレーと東京」
シリコンバレーと親になった「コンピューター・キッズ」の子育てのあり方を現地調査に基づいて検討するとともに、シリコンバレーでは日本の IT 産業にはマネジメントとビジネスビジョンの欠如が問題とされている一方、日本を知る関係者からは、東京では最先端の技術が絶えず人々の生活に応用されている点が肯定的に捉えられていることが紹介された。
3.2. 石井千春（法政大学）／「江戸時代の科学技術と現代のロボット」
江戸の電気学の始まりとしての「エレキテル」と機械工学の始まりとしての『機巧図彙』から出発し、米国のボストン・ダイナミクスによる「アトラス」のような現代のロボットのあり方や日本における高齢化とロボット、あるいは労働力減少の状況下で、解決策の一つとしてロボット技術の利用、さらにパワーアシストスーツの可能性が示された。
3.3. 田中和生（法政大学）／「テクノロジーとしての文学言語」
「リアリズム」「幻想性」「探偵小説」「記号性」を手掛かりとして文学におけるテクノロジーや東京と文学の関係を検討し、記号性には「常に新しい」「生れては消える」といった特徴が必要であり、パリやロンドンではなく東京のような都市でのみ成立することが可能であるといった点などが指摘された。
以上 9 件の報告と全体討議を通し、「テクノロジー」という視点から東京が持つ意味と可能性が検討されるとともに、「「都市設計」と「まちづくり」の関係」、「テクノロジーの「限界」と東京の特性」、「バイオテクノロジーの位置づけとテクノロジーへの楽観的な見方の問題点」といった今後の課題も提起され、意義深いワークショップとなった。

シンポジウム

「地域から外濠の再生を考える」

開催日：2019 年 3 月 25 日（月）
場　所：法政大学 外濠校舎 7 階　薩埵ホール

都心の貴重な水辺空間である江戸城外濠については，その環境改善について近隣の町会や企業の関心が高まっている。また，外濠を対象に大学や高校などの教育機関が連携して多彩な研究・教育活動を行っており，その様子がメディアにも取り上げられている。2020 年を契機に行政でも水質改善に取り組んでおり，地域にとっての外濠の価値はますます高まるものと考えられる。外濠沿いに立地する法政大学と東京理科大学が中心となり 2016 年に「外濠再生懇談会」を設置し，住民・企業・教育機関など外濠近傍の関係者が外濠についての議論を共有してきた。このシンポジウムでは両大学が連携した外濠再生支援を改めて表明し，地域が考える外濠の将来像を「外濠再生憲章」としてアピールするとともに，地域関係者が外濠の将来について討論した。

水都交流セミナー

「エクハルト・ハーン先生を囲んで／ベルリン近郊のエコシティと東京のグリーンインフラ」

開催日：2019 年 4 月 3 日（水）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　ボアソナードタワー　25 階　B 会議室

エクハルト・ハーン先生は、ドイツドルトムント大学教授として長年ドイツや EU のエコロジカルな都市計画を主導してこられました。法政大学エコ地域デザイン研究センターの客員研究員としても長く交流を続けており、今回は、ベルリン近郊で計画されている大規模なエコシティについて話題提供をしていただきました。当日は、定員 40 名のところ満席となり、意見交換も活発に行われました。

講演内容は、ベルリンから 40 ㎞ほどの距離にあるヴュンスドルフという町において最先端のエコシティとして計画しているものです。元軍用地の跡地再開発で、文化遺産となる既存建物を残しつつ、全域に資源・水循環システムを創り出すもので、最先端の土壌技術を用いた生産システムなどが紹介されました。移民対策や SDGs を踏まえた計画となっており、日本との差を大きく感じさせる内容でした。

講演を受けて、東京農業大学准教授の福岡孝則氏より、日本におけるグリーンインフラの展開の現状が報告され、これを踏まえて意見交換が行われました。

意見交換の司会進行は、法政大学エコ地域デザイン研究センターのセンター長を務める福井恒明教授が担い、客員研究員の神谷博兼任講師も加わり進められました。国策で進められている事業の採算性についての質問や循環再生技術の中心となっている土壌技術などについて意見が交わされました。2 時間という短時間のプログラムでしたが、有意義で濃密なセミナーとなりました。

ローザ・カーロリ教授講演会

「江戸・東京における佃島の誕生と発展（The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo）」

開催日：2019 年 5 月 14 日（火）

場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　ボアソナードタワー

イタリアにおける日本近現代史研究の第一人者であり，江戸東京研究センターの客員研究員であるローザ・カーロリ教授(ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学)による講演会が法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー25 階 研究所会議室 5 において開催された。氏のこれまでの沖縄史の研究からさらに幅を広げ、「江戸・東京における佃島の誕生と発展（The origin and development of Tsukudajima in Edo-Tokyo）」というテーマの発表が行われた。

大きく以下の 7 つのテーマに沿って話が進められた。

1．佃島のユニークネス
2．佃島を作った森一族
3．佃島の誕生
4．水上空間としての：佃島とヴェネツィア
5．空間の概念と配置
6．佃島の信仰空間
7．江戸の名所としての佃島

近世初期の佃島の成り立ちに始まり、沽券絵図を用いて詳細な分析と考察を行い、水辺や信仰の空間と様々な角度から佃島の歴史を解き明かした。

多くの参考文献や資料が提示され、今後の佃島研究の課題についても議論され充実した講演会となった。

磯崎新特別講演会

「東京は首都足りうるかー大都市病症候群」

開催日：2019 年 5 月 19 日（日）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス G403 教室

2019 年 5 月 19 日(日)，法政大学市ヶ谷キャンパス G403 教室にて「磯崎新特別講演会：東京は首都足りうるか～大都市病症候群」が開催されました。満席となった本会場と映像中継のサテライト会場を合わせて 700 名を超える方々が来場しました。

磯崎新氏は建築家のノーベル賞ともいわれるプリツカー賞（2019 年度）を受賞されました。今回はパリでの授賞式の直前に法政大学江戸東京研究センター主催の講演会にご登壇いただきました。氏は建築家でありながら「始源のもどき」「見立ての手法」「建築における『日本的なもの』」など日本論ともいえる著書を数多く著しておられ，この日の講演テーマも「東京は首都足りうるか～大都市病症候群」というタイトルで，「空間による日本論」とも言える論を展開されました。

まるでブラックホールのようにあらゆるものをのみ込み一極集中する東京について，神話の時代から昭和の世相まで幅広く考察したうえで，皇居のある東京という「首都」の持つ強靭な「意味」を，京都や沖縄に分散するという独創的なアイデアが，地形図，コンピュータグラフィック画像など多彩な図像とともに提示されました。講演の途中にはラッパーのダースレイダー氏による朗読も披露されました。

また，原武史氏（政治学者，放送大学教授）には政治思想史ならびに鉄道研究の立場から，高山明氏（東京藝術大学大学院教授）には演出家・アーティストとして，それぞれ参加していただき，登壇者 3 名で「首都性の分散は可能か」という視点から，刺激的な意見交換がなされました。画像を見ながら磯崎さんならびに皆さんの話を伺っていると，視点が東京から周辺に分散され，とりわけ沖縄から見る新しい日本が浮上するようでした。沖縄に移り住んだ磯崎さんは，日本を見る新しい視野を持たれたようです。

「東京の首都性」を問いかけながら，東京を相対化する方法を提示していただくことになり，非常に貴重なシンポジウムとなりました。江戸東京の過去と未来を研究テーマとする江戸東京研究センターとして，磯崎新さんに心より感謝申し上げます。

磯崎氏、原氏、高山氏によるパネルディスカッション

東京文化資源会議

開催日：2019 年 7 月 2 日（火）

２０２０年以降の新たな東京をつくっていこうとする有識者の団体「東京文化資源会議」との交流会を開催しました。「東京文化資源会議」は、上野、本郷、谷根千、神保町、秋葉原、神田、根岸等の特色ある文化を保有する地域を中核とした上野寛永寺から旧江戸城に至る東京都心北部一帯に残り、育まれているソフト、ハードあわせた様々な文化資源を活かした興味深いプロジェクトを進めています。江戸東京研究センターの一部のメンバーは、既に「東京文化資源会議」のプロジェクトに関与していますが、互いの活動内容について正式な情報交換をしたことがありませんでした。そこで、東京文化資源会議幹事長の吉見俊哉氏をお招きし、あらためて今後の江戸東京のあり方についての考えや、プロジェクトの計画などについてうかがいました。

「東京文化資源会議」の理念や活動内容についてお話いただいた後、「路面電車の都心復活」「湯島・駿河台の社寺会堂連携」「上野スクエアと不忍池再生」「上野ナイトパークの実施」など、現在計画中のプログラム案を紹介していただきました。いずれも江戸東京研究センターの事業内容と関わるものであり、質疑応答も盛り上がりました。今後も二つの組織のメンバーが互いに協力して、東京の文化資源を掘り起こし、活用することが期待されます。

シンポジウム

「東京と江戸をつなぐ～風景と場所」

開催日：2019 年 7 月 6 日（土）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　富士見ゲート G602 教室

江戸東京研究センターと法政大学地理学会との共催で、「東京と江戸をつなぐ～風景と場所」と題し、第 2 研究プロジェクト「江戸東京の「ユニークさ」」のシンポジウムが開催されました（参加者 188 名。本シンポジウムでは，建造環境などに残された痕跡や絵図や写真など刊行物に投影された描写を手掛かりとして、現代「東京」に見られる「江戸」や近代期の「東京」を探し出すとともに，「変わるもの」および「変わらないもの」についての検討を通じて，「江戸東京」の個性の一端を明らかにすることを目的としました。報告者は米家志乃布（本学教授)、牛垣雄矢（東京学芸大学准教授)、コメンテーターは根崎光男（本学教授)、横山泰子（本学教授・本研究センター長)、趣旨説明と司会は小原丈明（本学准教授）により、シンポジウムはとり行われました。

米家による第 1 報告では、「近代の名所図会・絵地図からみる江戸のイメージ」と題し、近代東京の代表的な名所図会である『風俗画報』別冊の「新撰東京名所図会」を中心に、明治期に生きる当時の人々にとっての東京名所のイメージが検証されました。その際、東京名所の表現方法、編著者の東京名所編集の意図、図像の特徴から読者が受ける名所イメージ、風俗画報における京都や大坂のイメージとの比較、という観点から東京の名所風景の特徴を読み解くことが行われました。

新撰東京名所図会の編纂目的としては、明治以後の「新景」を記述することを目的とすることが第一であるとされ、「細密優美なる図画」でもって江戸名所図会よりも正確な図会を作成することが重要であるとされています。新撰東京名所図会では、挿絵として山本松谷の石版画が中心となり、それに加えて多くの写真が掲載されました。ここで注目すべきことは江戸名所図会も時折挿入されており、挿絵・写真・江戸名所図会・地図という風景表現の媒体の点数を東京 15 区別に概観することで、四谷区をはじめとした麹町区の西側の区では写真表現が少ないことが明らかになりました。

次に、法政大学周辺地域の旧東京市 3 区（麹町区・牛込区・四谷区）を対象とし、近代東京の地域的特性を表現したものと江戸名所図会で表現された風景の特徴が紹介されました。また、同じ『風俗画報』別冊として編纂された「京都名所図会」や名所図会としては編纂されなかった大坂の記述表現との比較も行われました。その結果、「風景」を対象化する眼差しは、江戸時代後期にすでに「真景図」（や広重の浮世絵）によって確立しており、この眼差しにとっては、絵画よりも写真が優れていたことから、「風景」を対象化していくうえで写真にかなわない絵画は、人物を焦点に据えた場所の描写、体験の描写、に特化していくのではないか。それが最終的には風景表現は写真中心へとなっていくことが指摘されました。また、東京名所図会の挿絵・写真は、近代化した「新景」の東京であり、一方で、江戸名所図会の挿絵で示された東京のなかの「江戸」のイメージは残存したまま、読者にとっては「「旧観」の何たるを知る」手段となっていました。つまり、「東京」と「江戸」はセットで把握されるべきものであったといえるでしょう。京都や大坂の表現は、東京ほど過去の「江戸」を意識した記述や構成にはなっていないことも特徴的でした。これこそが、変化の激しい「東京」の風景表現であったといえると結論づけられました。

牛垣による第 2 報告では、神楽坂地区における地域的個性の形成と変化についての検討がなされました。日本初の近代都市計画である東京の市区改正事業において，幹線道路が指定され路面電車が敷設され、それ以降，道路は「交通」という観点での合理化が図られたが，買い物や子供の遊び場といった多様な機能はなくなり，賑わいは喪失したことが指摘されました。幹線道路沿いでは高い容積率が指定されたために大規模で高層な建物が建設され，高地価により地価負担力の弱い個人商店は撤退し，チェーン店が集積します。一方，神楽坂を通る早稲田通りは幹線道路の指定から外れたため，大規模な開発やチェーン店の集積は遅れました。

商業経営の合理化により一律の商品やサービスを提供する店舗が広がった社会を，ジョー

ジ・リッツアは「マクドナルド化した社会」と呼び、チェーン店は，規模の経済によって安価で高品質な商品を提供し，予測が可能で，当たり障りのないサービスを提供し，安心感を与える等の長所があります。反面，客同士や店員と客との人間関係が希薄で，商品を発見する喜びがなく，どこでも同じ外観で同じ商品を扱うために消費の経験が均質化する等の短所があります。地球表面上の場所的な差異が生じる理由を究明する地理学にとって，消費空間の場所性が喪失することは大きな問題となります。また消費の経験を「どこで」行うかに固有の意味をもたないことは，消費に関する「経験の豊かさ」を損ねているともいえるでしょう。

神楽坂は，東京の都心周辺に位置する都内有数の飲食店街であり、かつては料亭街として賑わい，今日でも都心の近くにありながら昔ながらの景観を残している場所です。神楽坂の料亭は，日清戦争後の好景気によって集積し，当時は周辺の軍事施設の軍人や早稲田大学の書生らによって利用されました。毎晩のように開催され賑わった縁日も，夜の歓楽街の発展に貢献しました。市区改正事業の議事録によると，神楽坂は勾配が急であり路面電車を通すことが困難であったため，都心から北西方面へのびる幹線道路の指定から外されましたが、これにより江戸時代の狭い道路幅員を踏襲し，早くから歩行者専用道路としたことで縁日の賑わいをもたらしました。神楽坂における歓楽街の形成は，地形的要素の影響が大きいといえます。

第二次世界大戦後は，商談の場としてゴルフが利用され料亭は激減し，料亭と取引関係にあった他業種にも大きな影響をもたらしました。料亭の跡地では大規模な高層マンションが建設され，その際には景観保全派による反対運動も生じます。

神楽坂の中高層建築には空室率の高い建物も多く，そういった場所で新たな大規模開発が生じる可能性もありました。一方で，神楽坂の中高層建築はかつての料亭の狭い敷地を踏襲しているために建物面積が小さく，その上層階には多くの飲食店が入居し、更に近隣の日仏会館の存在によってフレンチレストランが立地し，その後に他のエスニック料理店なども集積して多様な業種からなる飲食店街が形成されました。近年では「神楽坂」の名称はブランド化されつつあります。神楽坂では，料亭を利用する男性の街から食に関心をもつ女性の街へ，また料亭という伝統的な地域から食に関する流行の発信地への変化がみられます。このように神楽坂は，商業空間の近代化から免れたことで，固有の発展をみせている、と結論づけられました。

根崎による米家の第 1 報告へのコメントでは、「江戸名所図会」と「新撰東京名所図会」を比較してみると、江戸の図会が同時代を描きつつ考証を通じて過去との繋がりを重視したことに対し、明治の図会は同時代の新風俗そのものを描くことで新しい時代の到来を人々に直視させようとしたところに違いが見られることが指摘されました。また、名所を明治の図会では東京市 15 区という行政単位を意識しつつ選び、江戸の図会がそれよりもさらに広域的に扱っているのはそれぞれの時代の要請に応えたものであろうか、と問題提起がなされ、これについても後ほどの総合討論においても活発な議論が展開されました。

横山による牛垣の第 2 報告へのコメントでは、「東京と江戸をつなぐ」という観点から、江戸文学における神楽坂についての補足がなされました。神楽坂という名称について、市ヶ谷八幡や若宮八幡の祭礼の神楽との関係が考えられており、また、坂の上の善国寺の縁日が有名だったことが黙阿弥の作品などからわかることが指摘されました。同時に、夜は静かで寂しい場所であったことも随筆等から明らかであったこと、近代化とともに神楽坂の風景は一変したけれども、宗教的・芸能的な場としての神楽坂の性格は保たれているのではないか、と述べられました。

総合討論では，『新撰東京名所図会』の対象とする範囲や場所，対象物，編纂された時代性について，交通整備など都市開発に伴う場所性や場所感覚の喪失などについての議論が交わされました。そして，米家報告で取り上げられたそれぞれの名所や，牛垣報告での神楽坂などブランド化された地域に関する共通点として，地域の範囲や地形など「変わらないもの」による場所性の形成が重要であることが問題提起されました。

以上、報告・コメント・総合討論ともに、多くの論点が提起され、人文地理学の方法論による江戸東京の地域的個性を論じることが、江戸東京という都市の過去・現在・未来を見通す大きな課題であることが示唆された大変有意義なシンポジウムでした。来場してくださった皆様に感謝申し上げます。

研究会

「コンテンツツーリズムと東京」

開催日：2019 年 7 月 18 日（木）
場　所： 法政大学 市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 25 階 研究所会議室

2019 年 7 月 18 日（木）18 時から、本学大学院政策創造研　究科 増淵敏之教授（コンテンツツーリズム学会会長、文化経済学会<日本>副会長）講演による研究会「コンテンツツーリズムと東京」が開催されました。51 名の出席を集め、会場は満杯でした。

コンテンツツーリズムとは、まだ耳慣れない新しい概念ですが、文学・映画・漫画・アニメ・テレビドラマなどの舞台となった土地を訪れる観光行動のことです。文学や映画の中に登場する場所を訪れる観光はかつてよりあり、熱海の寛一お宮の像のように、そこを訪れる人があまりに増えてモニュメントが出来た例もありますし、大河ドラマの取り上げた場所への観光は現在でも毎年盛り上がります。

その一方で、近年盛んになっているのは、アニメに登場する場所への「聖地巡礼」と呼ばれる観光行動です。アニメの背景はかつて全くの架空の場所でしたが、近年は風景の写真をもとにコンピュータ技術によって描かれるようになったために、場所の特定が可能になりました。その場所を公表する会社もありますが、一方で視聴者にその場所を探していただく楽しみを残す、という方針の会社もあります。

そして、ファンにとっては「聖地」の特定とそれに関する貴重な情報の交換が、SNS などコンピュータ・ネットワーク上で行われるようになり、ますます盛り上がるようになりました。アニメ作品（アート）自体がテクノロジーの進展とともに成立していますが、さらにコンピュータ・ネットワークという新しいテクノロジーによって、ファンの行動が劇的に拡大しているということもできます。アニメファンは海外でも大勢いるので、インバウンド観光にも大きなインパクトを残しています。

地方を描くコンテンツを地方再生に生かそうとする町おこしといった政策は、地方自治体にとっては重点課題でありますが、東京は特にそうしたコンテンツを生かす政策はあまり目立ちません。しかし、一方でコンテンツの題材という点からいうと、東京に関わるものは日本でも最大で、さまざまな描かれ方をされています。新海誠監督作品『君の名は』では、高速道路や高架の鉄道網が登場する一方で、須賀神社の石段など対照的な構図の配置が見事で、作品自体が多くの観客動員をしましたが、海外からも数え切れない多くのツーリストを惹き付けたことは周知の事実です。

米家志乃布教授（本学文学部）がコメントにあたり、コンテンツツーリズムは近年大変注目される分野になってきていることを地理学の視点から強調しました。増淵教授は、海外都市のコンテンツツーリズムの動向に研究を広げていくことにも言及されました。この分野の研究が今後も大変期待されます。

研究会

「近代東京と「スポーツの都」」開催報告

開催日：2019 年 8 月 2 日（金）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　大内山校舎 4 階

2019 年 8 月 2 日（金）、15 時から 17 時まで法政大学市ヶ谷キャンパス 大内山校舎 4 階 Y402 教室において、法政大学江戸東京研究センター第 2 研究プロジェクト「江戸東京の「ユニークさ」」主催の研究会「近代東京と「スポーツの都」」が行われた。報告者は鈴村裕輔氏（名城大学）、司会は横山泰子氏（法政大学）、コメンテーターは陣内秀信氏（法政大学）であった。報告の概要は以下の通りであった。

人類に普遍的な現象である「スポーツ」（英語：sports、ラテン語：dēportāre）は、語源的には「日常生活からの逃避」、すなわち「余暇」や「娯楽」としての「スポーツ」を意味した。「スポーツ」の基礎は信仰と闘争を祭典競技の形で結び付けた古代ギリシアで形成され、「神への捧げ物」としての競技会はローマ時代になって「見るスポーツ」へと移行した。その後、中世になると「スポーツ」は王侯貴族から市民の間に普及し、イギリスでは 16-17 世紀にかけて貴族階級の子弟に「スポーツ」の実践が奨励された。18 世紀に入るとイギリスにおいて「スポーツ」の規則や規範の整備が進み、国や地域、民族、宗教、習慣などを超えて規則、施設、用具、規範などが標準化される「近代スポーツ」が誕生し、1896 年に近代オリンピックの第 1 回大会がアテネで開催され、「スポーツ」はより国際的に伝播した。このように、長らく王侯貴族が主な担い手であった「スポーツ」は、経済・社会制度の発展とともに一般に広く普及して今日に至っている。

日本における「スポーツ」のあり方も、『日本書紀』の野見宿禰と当麻蹶速の力比べの伝説が示すように、闘争と信仰という性格を備えている。奈良時代には貴族の間で鷹狩、競馬、打毬、蹴鞠などが行われ、室町時代以降、剣術、柔術、弓術、槍術などが発展し、江戸時代に入ると武術が実戦的価値を失う一方で、儒教の影響を強く受け、精神修養の一環となった。また、多くの武術は武士や富裕な町人などが主たる担い手であり、王侯貴族を中心に発展したヨーロッパにおける「スポーツ」と類比的である。そして、欧米の「近代スポーツ」は明治時代に入って本格的に導入され、大衆の間で「娯楽」、「余暇」としての「スポーツ」が普及した。欧米各国における「スポーツ」の普及が 1860 年代に本格したことを考えれば、日本は欧米の潮流と約 10 年程度の差で「近代スポーツ」を導入したことになる。さらに、「近代スポーツ」の特徴の一つである組織化については、1911（明治 44）年に嘉納治五郎（1860-1938）が大日本体育協会を設立し、1912（明治 45）年に日本が最初のオリンピック（第 5 回ストックホルム大会）に参加したことが注目される。

ところで、日本には明治時代に入ると野球、サッカー、テニス、ラグビー、ゴルフ、バレーボール、バスケットボール、スキーが紹介された。これらの競技のうち、最も普及したのは野球であり、世界的に見れば広範な地域で普及したサッカーは長らく野球の後塵を拝することになった。それでは、何故日本においてサッカーよりも野球が普及したのであろうか。この問いに対する回答の一つとして考えられるのが、多くの「近代スポーツ」をもたらしたのが外国人である点に注目した、「米国人教師が多かったので野球がサッカーよりも普及した」という答えである。だが、例えばいわゆるお雇い外国人については米国人よりも英国人の数が多く、文部省が招聘した外国人も米国人が他国に比べて多いということは認められない。そこで、野球の普及の過程を検討すると、定着に失敗した開拓使仮学校（後の札幌農学校）の事例から日本における「近代スポーツの普及の条件」が推察される。すなわち、(1)外国人から「近代スポーツ」を紹介されるだけではなく、指導する日本人（特に学生）の存在、(2)十分な道具の用意、(3)継続して普及に取り組む指導者の存在、が不可欠であることが分かるのである。

また、日本における「近代スポーツ」の導入

に果たした東京という都市の役割については、(1)東京の学校で学んだ人材が郷里や任地で後進に対して「スポーツ」を指導、(2)用具を国産化できる技術力と、実際の製造に携わる技術者や企業の存在、(3)「スポーツ」を行う場所の確保、という点が注目される。特に、「近代スポーツ」を行う場所としての東京に注目すると、明治時代における東京の構造的変化が大きな役割を果たしたことが示唆される。実際、明治時代に入り、東京では旧武家屋敷などの接収と皇族、華族、政府高官、財閥関係者などへの払下げ、官庁による旧武家屋敷の利用とともに、大学、専門学校、高等学校、中学校などによる旧武家屋敷の利用がなされた。とりわけ、大学などの学校は「近代スポーツ」が導入され、担い手となる学生が存在するだけでなく、「スポーツ」を行う場所も備えていた。こうした点が明治時代の日本の都市の中でも東京に特徴的な性格であった。

以上から、日本における「近代スポーツ」の導入の特徴と東京の関係は次のようにまとめられる。

(1) 明治時代になって新たに首都となった東京には人材と技術が集積するとともに、欧米を経由して最新の文物がもたらされる。

(2) 特に「スポーツ」については、東京で学んだ学生が主たる担い手となり、最初は野球を中心に発展し、次第に他の「スポーツ」も盛んになる。

(3) その際、東京で生じた都市の構造的な変化が「スポーツ」を行う場所をもたらす。

このように、必然的な要素と偶然的な要因が重なることで、東京は日本における「近代スポーツ」の導入と発展の中心地となり、「スポーツの都」と呼ばれうる状況が生じたのである。

以上のような報告に基づき、陣内氏から「学校教育におけるスポーツの役割」、「近代化により都市空間で行われていた営みが施設の中で行われるようになったこととスポーツの関係」、「スポーツが行われた歴史と場所の歴史の関係」といった論点が提示された。

今回の研究会の結果、都市論や名所研究の観点から「スポーツ」を検討することの重要性や近代以前と近代以降の「スポーツ」のあり方の断続性と連続性の考察の必要性などの論点が得られ、今後の江戸東京研究において「スポーツ」を位置付ける端緒となった。

第 10 回外濠市民塾「外濠浚渫工事見学会」

開催日：2019 年 8 月 7 日（水）

陣内秀信・法政大学特任教授（エコ地域デザイン研究センター前センター長）による開催挨拶の後、工事発注者である東京都第一建設事務所および施工者である五洋・栄都建設共同企業体のご担当者から現在進めている浚渫工事の概要についてご説明いただきました。

説明が終わると、実際に浚渫している様子を見学するため、各班に分かれ外に出て、牛込濠から小石川橋までまち歩きを行いました。まち歩きは外濠市民塾スタッフによる案内で、史跡などの各所で解説を交えながら小石川橋まで移動しました。

浚渫工事の見学は、牛込濠でヘドロの吸引作業を見学し、パイプの行方をたどり、小石川橋では土運船にヘドロを積み込む様子を見学しました。そこでは、吐き出されるヘドロを現場の方に採取していただき、実際に採取されたヘドロを間近で体感しました。

その後、大学に戻り質疑応答を行い、各班で見学会の振り返りを行いました。振り返りでは、外濠浚渫工事への感想や期待など様々な意見が交わされました。

最後に、吉田珠美・三輪田学園中学校高等学校校長、宇野求・東京理科大学教授による挨拶で幕を閉じました。

今回の外濠市民塾には 45 名の方に参加いただきました。近隣の方々や三輪田学園の生徒さん、小学生から大学生まで、これまで以上に多様な皆様にご参加いただきました。また大学生を中心とする 16 名のスタッフにより運営しました。

本見学会は、東京都第一建設事務所、五洋・栄都建設共同企業体の皆様のご協力により開催することができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

「玉川の語源を探る夕べ」

開催日：2019 年 8 月 17 日（土）
場　所：二子玉川ライズ 5 階屋上の原っぱ広場

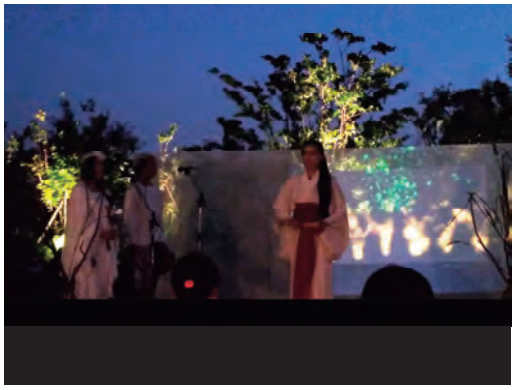
2019 年 8 月 17 日（土）18:30～20:00、「玉川の語源を探る夕べ」が開催されました。会場は二子玉川ライズ 5 階屋上の原っぱ広場で、参加者は約 50 名でした。はじめに、法政大学江戸東京研究センター（EToS）の神谷博より開催趣旨の挨拶があり、続いて第一部の「玉姫神楽」の披露がありました。引き続き第二部に移り対談が行われました。対談では、府中市郷土の森博物館館長 小野一之氏と法政大学文学部 教授 小林ふみ子先生にご登壇頂きました。登壇とはいっても会場は芝生広場で観客席も筵敷きという屋外イベントでした。

「玉姫神楽」は昨年の活動で三回公演したのに引き続き、今年は第二回目の公演となりました。この神楽は、山梨県小菅村に鎌倉初期から伝わる伝承をもとに創作したもので、主人公の玉姫は「玉川」の語源になったとされています。神楽も現代に伝わる江戸時代の神楽ではなく、鎌倉初期の形式を再現することを試みています。丁度まわりが暗くなった時に始まり、照明も最小限として背景に幻想的な光を流す演出を施しました。

第二部の対談では、先ず小野 館長から「多摩川、古代の風景を考える」と題して、「多摩川」と「玉川」どちらが古い？ 多摩川と多磨、どちらが先？ タマ川とタバ川はどんな関係？ なぜタマ川の名前になったのか？ など、興味深いお話を頂きました。歌枕の「六玉川」にも触れて、玉川は全国にも多く、自然発生しやすい名前でもあると指摘されました。最後に、多摩川の表記は多くあるが、一番古いのは玉川、とのことでした。

次にお話しいただいた小林ふみ子先生は、「玉川をめぐる江戸の文芸文化」と題し、「流域を歩いた文人、大田南畝から」というサブタイトルを付けて、南畝を軸に話を進められました。江戸時代の玉川は自然を楽しむ遊楽の地になっていた、文人的田園趣味の「郊行」があったとし、南畝の「玉川余波」より多くの引用を用いて解説されました。その中で、「水を治ることば」を紹介して玉川の姿を活き活きと示されました。古歌に詠まれる歌枕の地が、江戸期には心の俗塵を払う場所となり、治水の必要性という現実とともに生きていたことを語られました。

お二人の話題提供の後、対談というより掛け合いの意見交換があり、それぞれのお話を深めて頂きました。進行役の神谷からの質問も交え、予定時間をやや超えて終了しました。
閉会にあたり、後援を頂いた多摩川流域懇談会から国土交通省京浜河川事務著調査課長の斎藤氏よりご挨拶を頂きました。最後に、会場を貸していただいた二子玉川ライズとして東急電鉄の都甲課長よりご挨拶を頂きました。



御嶽山で語る畠山重忠 ～父と娘 玉川が紡ぐ魂の邂逅～」開催報告

開催日：2019 年 9 月 21 日（土）
場　所：武蔵御嶽神

2019 年 9 月 21 日（土）14:00～16:00、「御嶽山で語る畠山重忠～父と娘 玉川が紡ぐ魂の邂逅～」が開催されました。会場は武蔵御嶽神社の神楽殿で、参加者は約 50 名でした。はじめに、法政大学江戸東京研究センター(EToS)およびエコ地域デザイン研究センター研究員の神谷博より挨拶があり、今回の開催趣旨について、玉姫神楽の公演に至る経緯などの説明がありました。第一部の「玉姫神楽」は神楽殿にて披露され、参詣の方の参加もありました。引き続き第二部に移り対談が行われ、御嶽神社前宮司の金井國俊さんと法政大学名誉教授でエコ地域デザイン研究センター研究員の馬場憲一先生にお話しいただきました。

「玉姫神楽」は昨年の活動で 3 回公演し、今年は第 3 回目の公演で通算 6 回目となりました。この神楽は、山梨県小菅村に鎌倉初期から伝わる伝承をもとに創作したものです。主人公の玉姫は畠山重忠の娘とされていて、「玉川」の語源になったという物語です。御嶽神社には、畠山重忠奉納と伝えられる国宝の赤糸威大鎧があります。玉姫が入水した小菅村池の平の地にも、地元玉川地区の守護神社として御嶽神社があり、多摩川の流れが父娘の縁を紡ぐという趣旨で神楽を奉納いたしました。

（鶴巻育子 撮影）

第二部の対談では、先ず金井前宮司から赤糸威大鎧に関わる古文書のご披露がありました。神社に残されている重忠に関わる全ての文献について一つずつ解説を頂きました。文献上からは、確実に重忠が奉納したとわかるものはないとのことですが、後世にそう記された文書は多く残っているとのこと。江戸時代に将軍吉宗がこの鎧を江戸城に借りだした頃には重忠奉納ということが広く認知されたようです。

これを受けて馬場先生がさらにその背景なども含めて解説を加えました。馬場先生は「御嶽神社及び御師家古文書学術調査団」の団長でもあり、「重忠奉納鎧」伝承と社殿修復の関係について主にお話されました。資料上は畠山重忠奉納鎧の伝承は 1700 年代初頭に確認できるとのこと。1727 年、将軍吉宗が重忠鎧などの神宝上覧を命じ、その後 1734 年にも上覧している。これが武蔵御嶽山を「武蔵国号社」として権威を高めるのに役立ったという。それが 1743 年社殿修復の資金調達にもつながった。畠山重忠奉納鎧の伝承は、結果的に武州御嶽山の権威化が図られ宗教的文化空間を維持することにつながったとのこと。

お二人の話題提供の後、神社の方々などの参加者も交えて意見交換が行われました。エコ地域デザイン研究センターからは鳥越けい子先生も参加されました。また、玉姫伝承の伝承者である横瀬健氏も参加され、玉姫伝承についてのお話も直接聞くことができました。意見交換の中で、金井氏より「秩父鎌倉街道」という言葉も出てきて、玉姫の逃避行ルートがその裏道だったとみられることも分かりました。重忠鎧の伝承と玉姫の口伝、どちらも文献で裏付けを確定することはできませんが、こうした物語がまちづくりを創造してきたのではないか。それが心に火をつける原動力なのではないか、ということが結論でした。

研究会

「美術という見世物―江戸から東京へ」

開催日：2019 年 9 月 28 日（土）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　大内山校舎 4階 Y406教室

２０１９年９月２８日（土）１４時から、研究会「美術という見世物―江戸から東京へ」が開催されました(参加者 73 名)。なお、研究会のタイトルは、発表者の木下直之氏の著書『美術という見世物』（平凡社、１９９３年。サントリー学芸賞受賞）に由来します。江戸の都市の盛り場では見世物が気軽な庶民娯楽として人々を楽しませていましたが、明治以降、西洋から美術が輸入されると、伝統的な見世物小屋で美術が展示されました。また、美術館や美術学校が作られて､新たに「美術の枠組」が形成されました。こうした現象は、明治期において東京で顕著に見られたことで、江戸東京のユニークさやアートといった問題を考えるうえで注目すべきです。

川添裕・横浜国立大学教授の発表「見世物の名所 両国の変容」では、江戸の盛り場・両国の空間的な意味が問題とされました。浅草とならぶ盛り場であった両国は、回向院を有する信仰の空間でした。明暦の大火時の身元不明の死者を埋葬した回向院は共同の墓所であり、そうした特殊な聖地が遊楽の場だったことに、両国の特徴が認められます。諸国秘仏秘宝の出開帳のメッカとなり、さらに人を呼んで繁栄したのです。魚介の乾物で三尊仏をつくる「とんだ霊宝」の見世物や、曲独楽、曲馬、軽業、動物見世物など、極めて多様な見世物があったことが示されました。しかし、明治５年頃を最後に西両国広小路での見世物は消失し、両国が交通、通運、物流の場所としての役割を担わされると、見世物のトポスとしての両国の求心力は失われました。その後、明治近代には見世物の新しい興行地があらわれ、見世物の中身も新時代に即した新種のものが多くなりました。さらに、明治以後の見世物の場として浮上したのが、横浜、銀座、そして上野であることが示されました。

続いて、木下直之・静岡県立美術館館長による発表「美術の名所 浅草から上野へ」が行われました。両国と同様浅草も見世物で知られた盛り場でしたが、明治期に浅草と上野に公園が作られると、新しい時代にふさわしい見世物の場となっていきます。明治初期、五姓田芳柳と義松親子が、新しいタイプの見世物小屋（油絵茶屋）を浅草などで作り、当時のニュースなどを西洋伝来の油絵で描き、芸人の口上とともに客に披露しました。また、かつての日本において、公共的な場で見られる大きな絵といえば寺社の絵馬で、絵馬堂と美術館には、連続する面も認められます。浅草で人気のあった動物の見世物は、江戸の文化を継承しながら近代的な形に変容していきました。上野の博物館は西洋に倣って自然史も含めた森羅万象を見せる展示を目指し、生きた動物を展示して、寛永寺将軍家墓所近くでは家畜展示なども行われていました。浅草や上野の美術の場では、近世の見世物時代の古いやり方がなんらかのかたちで残りながらも、その見せ方が時代とともに変わっていったことが、数多くの資料から明らかにされ、日本と西洋の文化をめぐる、葛藤の様相が示されました。

明治期の過渡的な「美術という見世物」の様相は、現代人が何となくとらえている「美術」や「アート」という常識的な概念を、根本的に覆す力を持っていたことが確認されました。最後に山本真鳥・法政大学経済学部教授(文化人類学)のコメントならびに発表者同士の対話がなされ、充実した三時間が終了しました。

シンポジウム

「江戸東京の東西南北」

開催日：2019 年 11 月 17 日（日）
場　所：法政大学 市ヶ谷キャンパス　外濠校舎 2 階　S205 教室

江戸東京のもつ多様性の一つとして、地域ごとの特性を歴史的な成立過程から考えようと「江戸東京の東西南北」と題するシンポジウムを実施しました。東京のなりたちをふり返れば、その骨格には、江戸城の西に広がる武家地として発展した山の手に、神田・日本橋を中心とする町人たちによる下町が商業地として対置されるという構造があるのはよく知られているとおりです。その対照的な両者がそれぞれ西と東に大きく拡張し、それを基盤として都市としての東京は発展してきました。また芝、品川から先は湾岸が埋め立てられるとともに東海道に鉄道が走った南部、上野・本郷といった文京地区を抱えつつ郊外として工業地帯となっていった北部と、方角ごとに異なる発展を遂げて今日に至ります。

こうした認識のもと、建築史・都市構造の観点と都市を描く文学・美術の観点と、理系・文系からのまなざしを交差させるかたちで以下の４名のスピーカーによって多角的にこの問題に迫ったのが今回の企画です。司会も理系・文系双方から高村雅彦・小林ふみ子が共同で務めました。

まず、前センター長でもある陣内秀信氏が山の手・下町の変容を論じられました。江戸時代以来形成された下町に東京の本質を求める見方が関東大震災を機に逆転し、以後それぞれが東西に広く展開するなかでターミナルとなる盛り場が西へと移動したこと、しかし事態は単純ではなく、庶民的ともいえる「下町」的要素が西側にも取りこまれるいっぽうで、近年はかつて「山の手」の専有的要素であった先進的な洗練された建築や文化的拠点が東側にも展開するようになり、それぞれの概念の交錯があることを報告されました。

続いて、東京の南北にわたる地域が東・西とは異なる特性を持つ「サードドメイン」であることを提唱する日埜直彦氏が、地形に応じた土地利用に由来する地域の発達を論じられました。近代に入って、西郊に広がる水の得にくい台地が「山の手」のホワイトカラーの居住地に、また東側の水の豊富な地域が素材工を中心とする工業地帯となって非技能工が集住する地域となったこと、それに対して、南北の傾斜地の多い地域はもともと水車を利用したこともあって軍需工場・機械工業を支える技能工の住む街として、下町とも異なる特性をもつ地域になったという分析を提示されました。

本学の名誉教授で日本近代文学、とりわけ私小説の研究で知られる勝又浩氏は、近代文学における東京の描き方を概観したのち、作家たちが引っ越しを繰り返すなかでそれぞれの地域を描く作品群を〈引越小説〉の系譜と名付けて論じられました。少女時代から東京の下町から北部を転々としながら貧しさのなかで多くの職業を経験した佐多稲子、大学進学のために上京して早稲田界隈などで下宿をわたりあるき、騒動あり、さりげない気づかいありの独特の人間関係のありようを描いた井伏鱒二から、それらの地域に人間教育の場としての東京が見いだせることを指摘されました。

最後に、浮世絵、とくに明治版画研究の第一人者である岩切信一郎氏が登壇、歌川広重や渓斎英泉などを例として、浮世絵風景版画においては富士山・筑波山、日の出入り、橋の向きなどによって方角表現が明確に意識されていたことを論じられました。また東西南北をめぐるイメージとしては、西が富士山・京都そして西方浄土と重ねられて地図では上に描かれたこと、北といえば吉原遊廓、南といえば遊里でもあった品川宿と海辺の景色が結び付けられていたこと、近代に入ると写真も登場するなかで新たな名所は大きな建造物となり、現在の中央区周辺の新たな繁華街に集中していくことを述べられました。

以上のように、漠然と山の手・下町カテゴリーだけで分けて考えることのできない、地域ごとの特性、その交錯や歴史的変容、さらに空間的把握だけではなかなか見えてこないそこに生きる人間たちにとっての意味など、多岐にわたる観点を見いだし得た貴重な午後でした。また文・理の協働を進めていくことの意義もあらためて確認される機会となったと思います。

研究会

「東京首都圏のグラフィティとストリートアート」

開催日：2019 年 11 月 21 日（木）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス 大内山校舎 8 階 Y805 教室

「落書き」を意味するグラフィティは、1970 年代のニューヨークで若者たちに爆発的に広まったムーブメントであり、コミュニティ内部にはさまざまなルールがあった。グラフィティ・ライターたちは、タグと呼ばれる自分のサインをできるだけ美しく多くの場所に書き、自分の存在をアピールした。人のタグの上に自分のタグを書くのは挑戦ともいえる行為であり、より上手にタグを書ける人のみに許された。都市に暮らす仲間同士のコミュニケーションだったともいえる。当初は移民の若者が中心であったが、後には白人の若者にも広がり、世界各地に波及した。

日本では、90 年代に入ると、落書きに関わる新聞記事がぐんと増えることから、この時期に流入したようだ。グラフィティ・ライターのコミュニティが拡大し、スプレー缶などの用具を売る専門店ができて、そこを介して情報交換が行われた。一方、落書きが社会問題化されるようにもなった。横浜桜木町の国道 16 号線沿いの高架下の壁には当時多くのストリートアーティストやグラフィティ・ライターたちが描く（書く）ようになり、グラフィティの「聖地」と呼ばれた。この地では 70 年代からアーティストによる創作活動は行われていたが、グラフィティが本格化するのは 90 年代である。

グラフィティはもともと公共物に不許可で絵や字を描（書）くことから始まっているが、その中から芸術家に位置付けられる作家が出てきたり、それらを広告に利用しようとする企業も出てくる。その一方で、それらを迎合主義として自由な絵や字を描（書）く営みを守ろうとする人々もいる。グラフィティを排除しようとする市役所などとの仲介をして、グラフィティ・ライターに街の景観作りに一役買ってもらおうという NPO も登場するが、一定の壁を用意して有名なライターに書いてもらおうとしたり、住民の意見を取り入れる要望を出したりするために、自由に描（書）けないというライター側の警戒心がとけず、この NPO の活動は停滞している。一方で、桜木町の壁は行政上の措置により、現在は白く塗られて、「落書きは器物損壊に当たる」という市役所の掲示が掲げられた。

グラフィティが書かれるところは、隙間や建物と建物の間など、ちょっと奥まった隙間のようなところが多い。ボードリヤールは、グラフィティは意味の集積である都市に意味のないものを投げて壊す、「からっぽの記号表現」であると述べている。ストリートは、管理社会が強まる中で自律的な空間を提供し、排除よりは結合へと向かう運動の場となっている。

コメンテータはこの発表を現代的かつグローバルな文脈に置きなおす解説を行った。コメンテータは、10 年以上にわたり、ストリート人類学の立場から、ストリートに現れた現代社会のグローバル現象を考察する研究会を行ってきた。グラフィティはニューヨークで始まったが、世界中の先進諸国の都市に瞬く間に広がった現象である。脱領土化した近代化の中で、管理社会が次第に姿を現してきた。汚いもの、ルールから外れるものが排除され、国民主権から国家独裁への移行の傾向が強まってきている。しかし、ストリートこそは、異なる人々が出会い、交渉し、自律的なものを作り出す場であり、可能性を探し出す場である。グラフィティは、そのようなストリートのエッジを見えるようにするものであり、ストリート・エッジを探すフィールドワークが我々にはますます必要となってきている。

発表者：山越英嗣（早稲田大学人間科学学術院助教）
コメンテータ：関根康正（元関西学院大学教授、神奈川大学アジア研究センター研究員）

研究会

「テリトーリオ研究会」

開催日：2019 年 11 月 27 日（水）

エコ地域デザイン研究センターでは持続可能な地域に関するモデルとしてテリトーリオ概念の研究を進めている．テリトーリオとは「地域」を意味するイタリア語で，都市とその周辺領域における環境や社会 経済・歴史文化，その関係性を含んだ概念である．
テリトーリオ研究を組織的に進めるための研究会の初回として，国内の重要文化的景観選定対象地から京都中川と葛飾柴又について話題提供を依頼し，これに基づく議論を行った．恵谷浩子氏（奈良文化財研究所）からは北山杉の産地である中川のなりたちや生業の様子，出荷先である京都区）からは古代以来の柴又の成り立ち，江戸・との関係を中心に，谷口榮氏（葛飾東京，広くは関東との関係についてプレゼンテーションをしていただいた．

これに対して陣内秀信特任教授より，文化的景観とテリトーリオ概念の関係性に関する解説とともに，町方（まちかた）と地方（じかた）の区別が明確な京都と，その区別に曖昧さや多義性がある江戸との違い，地形学・地質学・考古学・歴史学などの様々な観点から古代以来の継続的な研究成果がある柴又の特異性への指摘がなされた．

その後，出席者からそれぞれの専門性に基づく論点提示がなされた．例を挙げれば，領域のエッジと信仰・聖地の関係，都市とその周縁に関する支配構造や地域自治の問題，世界と日本の文化的景観政策の差異など，非常に多岐にわたるものであった．今後のテリトーリオ研究の展開可能性を感じさせる研究会となった．

研究会

「建築フォーラム 2019」

開催日：2019 年 10 月 1 日（火）、15 日（火）、29 日（火）、11 月 5 日（火）、19 日（火）、26 日（火）、12 月 3 日（火）
場　所：政大学デザイン工学部 市ヶ谷田町校舎 5F マルチメディアホール

本年度 5 月 19 日に EToS 主催で開催した「磯崎新講演会」では「東京は首都たりうるか－大都市病症候群」というタイトルで行われた。国家の中心を首都であるとすると、その政治的中心に関する議論となり、天皇制の問題が浮上する。この天皇という存在がつくる都市空間について時空間に渡る壮大な構図としての仮説が展開された。この時はパネラーとして政治学者の原武史と演出家の高山明が出席していたが、与えられた時間が短く磯崎が提出する構図に組み込まれていたようである。そこで「建築フォーラム」では、おふたりに再登場を願った。原武史は皇居前広場を歴史的に検証し、高山明はヨーロッパ文明を相対化する思想を提示した。その後、「磯崎新講演会」を聴講していた社会学者の吉見俊哉が「東京文化資源区」という権力ではなく文化を中心とした都市構想を対案として示した。

そして、アートキュレーターの長谷川祐子、建築都市エディターの太田佳代子、アートプロデューサーの相馬千秋に表現領域からの都市分析を語っていただいた。最後に建築家の藤村龍至に東京という都市の成立過程と現代の問題、そして未来の展望というかたちで総括をいただいた。EToS の「都市東京の近未来」で想定している問題群の所在と近未来の方向性を確認する良質な作業となった。

研究会

「東京大空襲を考える－その政治的影響を中心に－」

開催日：2019 年 12 月 4 日（水）
場　所：法政大学市ケ谷キャンパス　ボアソナード・タワー25 階　B 会議室

中堅の気鋭の日本近現代史研究者である鈴木多聞氏（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員、法政大学兼任講師）にお願いして「東京大空襲を考える－その政治的影響を中心に－」と題する公開研究会を開催した。東京大空襲が、当時の様々な政治勢力や人々に、どのように考えられ、それが「戦後」にどうつながっていったのかを、日米双方の視点から考えることが目的である。
じつは東京大空襲は、原爆投下と比較すると、国際的な関心が高くないといわれていて、原爆投下の影響については様々な論争があるものの、東京大空襲の政治的な影響については、わかっていない部分も多い。鈴木氏は今回の報告準備のため、夜中に東京の下町を歩いてみたそうである。消えてしまった空襲警報の音、炎、焼失してしまったもの、シンボル、戦争遺跡、過去の経験など、歴史として、どういう表現や方法で、次世代に継承すればよいのか。空襲の傷跡を生々しく伝えているイチョウの木もあったとのこと。言問橋の西側には東京大空襲戦災犠牲者追悼碑がある。言問橋の欄干と縁石は、今は江戸東京博物館の前にあるという。
今回提示された注目すべき史料として『朝日新聞』1942 年 10 月 2 日の記事がある。見出しは「虎視眈々・米空軍東京空襲を企図／綿密なる調査を了し模型で爆撃の猛訓練　本土防衛寸刻も怠るな」である。これのニュースソースが気になるところである。
また空襲後、東久邇宮盛厚王は、千葉街道をとおって、千葉から都内にはいっている。このとき、どのような臭いをかぎ、何を見たのか。のちに、東久邇宮盛厚王は、昭和天皇に対し、戦争に関して「色々具体的な報告」をしたといわれる。
『昭和天皇実録』には「去る十日の東京都内における空襲罹災地のうち、深川・本所・浅草・下谷・本郷・神田の各区を自動車にて御巡視になる」「焦土と化した東京を嘆かれ、関東大震災後の巡視の際よりも今回の方が遙かに無惨であり、一段と胸が痛む旨の御感想を述べられる」（3 月 18 日）という記述がある。
また『大本営陸軍部作戦部長宮崎周一中将日誌』には「根本対策を急速確立せざれば帝都の敗亡なり」とある。他にも様々な史料がある。言語化には限界がある。記録された動画の中には「話を聞くと、それはまだ子どもですからね、火の海の中で死んだって言うんじゃなくて『前も後ろも上も下も右も左もみんな火だったんだ』」という証言があった。言語化できない部分を、どう継承すればいいのか。この点は「火」や「炎」だけにとどまらない。たとえば、ある時代には、ある言葉にあるニュアンスがともなったことがあるという。
東京大空襲という重大なテーマを、鈴木氏らしい斬新な切り口で扱った貴重な報告であった。

研究会

「江戸の天文学」

開催日：2019 年月日（木）
場　所：法政大学小金井キャンパスのマルチメディアホール

2019 年 12 月 8 日，法政大学小金井キャンパスのマルチメディアホールにて「講演＋座談会 江戸の天文学」が開催されました。

今回は、天文学者の講演と江戸文化研究者をまじえた座談会の二部構成で行われました。

中村士 元帝京平成大学教授による講演「江戸の天文学 西洋科学受容のパイオニア」では、古代から中国の学問一辺倒だった日本において、徳川吉宗の時代に西洋の科学技術を学ぶ道が開かれ、西洋天文学の知識が改暦に生かされたことや、天文学を一般庶民に啓蒙する遊歴の天学家がいたことなどが豊富な資料とともに示されました。続いて、田中優子法政大学総長のコメントにより、学者たちの知的発見が当時の人々の生活文化の中に入っていったことが指摘されました。

さらに座談会では、中村教授、田中総長に岡村定矩 元法政大学理工学部創生科学科教授が加わり「天文学の場 江戸東京」のテーマで、文理をこえたトークが交わされました。江戸の天文学が暦や地図の作成や算額などにかかわる総合的な学問であったことが確認されるとともに、その後、東京特に小金井周辺の西東京でどのように展開したかが語られました。小金井キャンパス周辺には、国立天文台、情報通信研究機構、多摩六都科学館などがあり、天文学の場としての地域の個性が明らかになりました。

さらに、法政大学理工学部創生科学科で行われている天文研究や活動が紹介されました。江戸東京研究センターの企画としては初めて、理工学部・生命科学部・情報科学部のある小金井キャンパスでの開催となった本イベントでは、都心部ではできない調査研究や地域連携の可能性が示されました

シンポジウム

「歌舞伎の江戸東京―都市空間と劇場街―」

開催日：2019 年 12 月 15 日（日）
場　所：法政大学市ヶ谷キャンパス　ボアソナードタワー26 階スカイホール

２０１９年１２月１４・１５日、法政大学市ヶ谷キャンパスにて「歌舞伎学会秋季大会」が江戸東京研究センターとの共催として開かれました。今年度の大会企画は「歌舞伎の江戸東京―都市空間と劇場街」と題し、江戸東京における芝居町／劇場街の空間的な意味を多様な資料から考察することを目的としました。

最初に仲光克顕氏(東京都中央区教育委員会・中央区立郷土天文館）の講演「江戸の歌舞伎と考古学」により、発掘調査の結果、芝居町に関する遺構・遺物が発見されたことが豊富な写真とともに説明されました。墨書が入った食器類や高級な食器類、芝居小屋の入場札など、歌舞伎関連の考古資料は歌舞伎研究者たちに大きな感動を与えました。これまで歌舞伎研究は文献や絵に頼りがちでしたが、近世考古学の成果によって「物」を対象とした新たな研究の可能性があることが示されました。

続いて、光延真哉氏(東京女子大学)による報告「江戸の芝居町」では、江戸の芝居町の変遷史、地図や稀覯の芝居細見などから二丁町の様子が示され、江戸の芝居町が町人地の端、商業圏に隣接していたこと、川の近くにあったことが述べられました。

佐藤かつら氏(青山学院大学)の報告「明治の劇場街」は、法令史をふまえたうえで、明治期東京に設立された劇場の変遷を地図と表で視覚化し、劇場にでかける人々の行動や交通手段についての例を示しつつ、劇場街の空間を考えるものでした。

最後に児玉竜一氏(早稲田大学)の「江戸東京と他都市の芝居町空間」は、文政８年（１８２５）の番付によれば日本全国に１３０の劇場があり、昭和４６年（１９７１）の『農村舞台の総合的研究』(角田一郎編)でも農村舞台が３０００あったというかつての圧倒的な数を前提に、日本全国の芝居町を考える必要があること、そうした劇場が後に映画館に転じたがゆえに、芝居町と劇場の研究は映画館の調査も視野に入れてなされるべきという大きな問題提起がなされました。

光延氏、佐藤氏、児玉氏による座談会では、観客の特定の劇場に対する忠誠心、劇場が水辺にあったことの意味、今後の研究課題などについて様々な話題が扱われ、充実した１時間となりました。なお、大会企画の記録は歌舞伎学会の雑誌『歌舞伎 研究と批評』６６号に掲載される予定です。

シンポジウム

「ヴェネツィア国際シンポジウム」

開催日：2020 年 1 月 13 日（月）/14 日（火）
場　所：カ・フォスカーリ大学（イタリア・ヴェネツィア）

2020 年 1 月 13 日、14 日の二日間、江戸東京研究センターとイタリアのカ・フォスカーリ大学との共催で国際シンポジウム「水の都市としての東京とヴェネツィア―過去の記憶と未来の展望」が開催されました。ヴェネツィアのカ・フォスカーリ大学を会場とし、江戸東京研究センターからは田中優子総長、陣内秀信特任教授をはじめとする 11 名、またカ・フォスカーリ大学のステファノ・ソリアーニ、ローザ・カローリの両教授がホストとなり、ヴェネツィア IUAV 大学、パドヴァ大学、リーズ大学、ユネスコなどヨーロッパ各地から 15 名の研究者、さらにローマ日本文化会館館長、ミラノ総領事らも駆けつけてくださり、総勢 30 名を超える日本とイタリアの関係者が一堂に会し、水の都市について考える二日間の夢のようなシンポジウムが実現しました。

このシンポジウムは、陣内秀信教授が進行役を務め、田中優子教授とヴェネツィア IUAV 大学のドナッテラ・カラビ名誉教授による基調講演で幕を開けました。同じ水の都の江戸東京とヴェネツィアについて、歴史的な観点からその特性を二人は見事に明らかにされ、また重要な視点を示しながら、そのあとに続く各研究者の発表内容をつむぐ重要なテーマを提供し、シンポジウム全体のベースをつくる貴重な講演となりました。

各セッションは「場所の記憶、水の記憶」、「地図と地理から考える水の都市」、「文化遺産の未来」、「水都と周縁」、「グローバルシティとしての経済・文化・ガバナンス」の 5 つからなり、江戸東京とヴェネツィアの持つ魅力が前面に押し出されるとともに、両者が抱える問題も明らかとなりました。日本とイタリアの都市と社会、その歴史から、当然のように両者には違いが見られるものの、実は水の都としての場所や空間、時間の意味に同じ文脈が存在しているといった認識が会場全体で共有され、議論は大いに盛り上がりを見せました。様々な角度から、江戸東京とヴェネツィアの都市に見る水の都市の特質とその可能性についての意見が交わされ、生き生きとした刺激的なシンポジウムとなりました。このシンポジウムの内容は、2020 年度中の書籍化が進められていますので、ぜひ楽しみにしていただきたいと思います。

国内だけなく、こうした国外でのシンポジウムや学術交流を通して、法政大学江戸東京研究センターの意義と役割を国際的に広く周知でき、また我々もその期待を実感した貴重な会であったと言えるでしょう。今後、当センターがいかに展開していくべきかを知る重要な機会となりました。

そして、2020 年 6 月には、次にアジアを対象として日中韓を中心とする国際シンポジウムを法政大学で企画しています。ぜひ今後の活動に期待していただくと同時に、関係各所からの積極的なご協力、ご助言をいただけますようお願い申し上げます。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 1 回）」

開催日：2019 年 3 月 14 日（木）
場　所：神田明神文化交流

全 8 回にわたる連続講座の第 1 回は田中優子・法政大学総長が「江戸を使いこなす」というタイトルで講演を行いました。

近世の江戸の人々が，「見立て」と「やつし」という「変換」を用いることによって伝統文化を自分たちの生活に取り入れ楽しんでいたこと，一人の人間が複数の名前を使い分けて多様な異なる場面や役割で活躍していた様子、さらに、外から入ってきた文化や新しく開発された技術が自分たちの未来の生活に与える影響を想像する力を持っていたことなどを様々な図像資料を基に実証的に解説し、これからの日本が江戸から何を学ぶべきかについて考察しました。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 2 回）」

開催日：2019 年 4 月 10 日（火）
場　所：神田明神文化交流

第 2 回は陣内秀信・法政大学特任教授が「東京－水の都市、水の地域」というタイトルで講演を行いました。

江戸東京における近世から近代までの水辺の賑わいと高度成長期以降の水辺の衰退、そして、近年における水辺の復権を古地図や図版、写真を用いて説明し、東京が水の都市、水の地域であるということを実証的に考察しました。

また、実践的な試みとしてエコ地域デザイン研究センターでの日野や外濠の活動を振り返りながら、水都東京を解読するために必要な水辺からの視点を提示しました。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 3 回）」

開催日：2019 年 5 月 16 日（木）
場　所：神田明神文化交流

第 3 回は横山泰子（法政大学教授、江戸東京研究センター長）が「江戸東京におけるカッパ」というタイトルで講演を行いました。

現在では一般的に知られている河童のイメージがどのように確立し伝播していくのか、文献や浮世絵さらに地図を用いて実証的に考察し、河童と江戸東京との関係を明らかにしました。河童の容姿や名称は、情報の集積地である水辺が人間のすぐそばにあった近世中期以降の江戸で確立し、共通認識として広まるようになったことが参考文献を紹介しながら説明されました。そして、近代になると小説の中で多く取り上げられ、徐々にそのイメージを変えていき、現代では好意的なイメージがひろがりまちおこしにまで使われるようになったとの考察が示されました。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 4 回）」

開催日：2019 年 5 月 31 日（金）
場　所：神田明神文化交流

高村雅彦（法政大学教授）が「古代地形から読む神田明神とその景観」というタイトルで，文献のみに依らず基層（古代地形）から再現する古代・中世の景観について考察しました。

まず、地形図や歴史資料をもとに、古代・中世の城や神社が自然の地形や地質を根底に配置されていたことについて説明がありました。さらに都内の基層のデータから再現された当時の地形の立体画像をもとに、神田明神や都内各地の神社からの当時の景観を想像し、人々の生活と地形とのつながりについて考察しました。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 5 回）」
開催日：2019 年 6 月 15 日（土）
場　所：神田明神文化交流

今回は根崎光男（法政大学教授）が「将軍の鷹狩りと江戸の町」というタイトルで講演を行いました。

鷹の確保方法，将軍家と大名の間の鷹の献上や下賜の習慣，獲物の確保方法や献上先，鷹狩り行列の様子，鷹狩りに関わる役職制度，鷹狩りや獲物の飼育がおこなわれていた地域など，江戸時代の鷹狩りの様子や都市化が進む江戸の町の様子を多くの原資料を用いながら多角的に解説し，江戸時代において鷹狩りが将軍の権威の象徴として機能していたことについて考察しました。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 6 回）」
開催日：2019 年 6 月 27 日（木）
場　所：神田明神文化交流

第 6 回は小林ふみ子教授が「江戸狂歌の大流行－山の手でも下町でも神田明神社内でも」というタイトルで講演を行いました。

江戸狂歌のルーツを初めてとして，異なる身分の人々が集い大衆参加型文芸として広がった狂歌グループの様子や，狂歌師たちのユニークな「狂名」，神田明神など各地で開かれていた狂歌の会の様子について多くの原資料を用いながら解説し，江戸時代天明期になぜ狂歌が大流行したのか，狂歌の持つ特性や時代背景などについて考察しました。

神田明神「江戸東京文化講座」は今後 2 回にわたり多様なテーマで江戸東京を掘り下げていきます。ぜひご参加ください（事前予約必要：受講料必要）。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 7 回）」
開催日：2019 年 7 月 11 日（木）
場　所：神田明神文化交流

川添裕 教授（江戸東京研究センター客員教授，横浜国立大学教授）が「力持の流行と神田明神の力石」というタイトルで講演を行いました。

神田明神の境内にもある「力石」（ちからいし）を題材に，江戸のまちに流行した力持（ちからもち）について十方庵敬順（じっぽうあんけいじゅん）の『遊歴雑記』（ゆうれきざっき）や歌川国安の錦絵を例に考察を行いました。

「力石」は，古い民俗では霊的なものとして扱われていたが，近世後期の都市ではもっぱら力試しに用いられるようになり，「力石」を持ち上げることが次第に娯楽化，遊戯化，曲芸化していきました。「力持」文化の醸成される文政年間に興行で賑わう様子や，力石だけではなく酒樽や米俵を町の若者たちが持ち上げる姿について解説を行い，力持が江戸のまちと深く結びついていたことを明らかにしました。

「神田明神：江戸東京文化講座（第 8 回）」
開催日：2019 年 7 月 23 日（火）
場　所：神田明神文化交流

第 8 回は福井恒明法政大学教授が「東京の文化的景観―江戸城外濠と葛飾柴又」というタイトルで講演を行いました。

生活・生業と風土が影響しあい形成され、維持されてきた「文化的景観」は、都市化と対極的な言葉として多く用いられていますが、今回の講演では、都市部における文化的景観を解釈するためには何が必要かということについて、これまで福井教授の携わってきた江戸城外濠や葛飾柴又を例に取り考察を行いました。

そして、都市部の文化的景観を理解し共有するためには、見えにくくなっている社会基盤の存在や地域の担い手の存在を浮かび上がらせ、それらの価値を発信していくことが不可欠であると結論づけました。

本年 3 月より 8 回にわたって開催してまいりました「神田明神：江戸東京文化講座」は今回を以て終了となりました。全 8 回で延べ 415 名の方々にご参加いただきました。ありがとうございました。

江戸東京アトラスプロジェクト

2019 年 10 月 5 日（土）13 時〜17 時まで、市ヶ谷田町校舎 1 階スタジオハルにおいて、「江戸東京アトラス」ワークショップが開催されました。

「江戸東京のユニークさ」プロジェクトでは、地形や水系などの基盤と文化・産業・交通などの要素を重層的に理解できるような情報コンテンツを作成することを目指し、デザイン工学部の福井恒明教授と文学部の米家志乃布教授の研究室協働による「江戸東京アトラス」の作成を 2018 年度より開始いたしました。2 年目の今年度は、江戸東京の名所に着目し、コンテンツの収集・整理と表現方法に関する試行を行っています。

横山泰子教授（本センター長）による開会の挨拶のあと、田中優子総長から私立大学ブランディング事業における地図作成の重要性およびプロジェクトに参加している学生・院生達への激励の言葉が述べられました。ワークショップでは、デザイン工学研究科と人文科学研究科の大学院生達による江戸東京の名所分布についてのプレゼンテーションが行われ、その際には大判の紙地図と PC 画面を駆使しながら、地図のコンテンツを確認しつつ考察試論が提示されました。

江戸の名所を描いた浮世絵の代表作である歌川広重の「江戸名所百景」では、名所百景に表現された江戸の名所の特徴を、GIS 上の地図に落としこみ 3 D 表現で提示しました。そこに描かれ表現された風景の特徴の意味について議論が行われました。次に、明治東京の社会を理解するうえでは一級資料とされる『風俗画報』別冊の「新撰東京名所図会」の分析では、1300 箇所以上の名所分布が地図に落とし込まれ、近代化にむかう東京の姿が描き出されました。さらに、現代では失われたものも多い東京の銅像をリストアップした『偉人の俤（おもかげ）』写真集を利用した銅像マップでは、近代化の象徴としての偉人・英雄の出現と都市空間との関係が浮かび上がりました。欧米の文明に追いつけ追い越せと近代化を急いだ東京の風景を語るうえで、銅像の存在が重要であったことが示されました。

ワークショップに参加したセンターの教員スタッフからは、それぞれの史資料にもとづいた名所分布の解釈、分類方法の改善や新しい分類の提案、アウトプットのイメージなどが述べられ、江戸東京のユニークさに関する知見を深めるために、今後どのような作業が必要かについて意見交換が行われました。長時間にわたる議論のあと、最後に陣内秀信特任教授（前センター長）による閉会の挨拶によってワークショップは終了しました。膨大な作業をお互いに協力し、熱心に行ってくれた学生・院生達には感謝するとともに、法政大学でしかできない文理協働のプロジェクトであることが改めて認識できた機会でした。（米家志乃布）

「東京発掘プロジェクト　水辺編Ⅱ」

デザイン工学研究科建築学専攻の院生を中心に、東京の水辺を対象に、その土地や建築、人々の営みを歴史的に解読し、その価値を発掘して、そこからさらに水とまち、人の関係を復元しながら新たなデザインの提示に至るまでを目指したプロジェクトを実施した。テーマの発想やプロジェクトの推進は東京スリバチ学会会長の皆川典久氏が中心に担い、当センターにとって強力なサポートを得ることができた。最終講評会には、100 名近くの一般の参加者が加わり、有意義な議論が展開した。昨年度と同じく、本年度も報告書を作成する予定である。(高村雅彦/皆川典久)

講義「東京 MAP」の作成

江戸東京研究センター(EToS)のブランディング事業は、個々人の研究の推進や外部との連携だけでなく、学生を中心とする学内への周知とその魅力的な世界への誘導、いわゆるインナーブランディングが欠かせない。こののとは、将来の江戸東京に関わる研究者や社会人の育成という意味でも重要なミッションである。そこで、デザイン工学部でが、学部 2 年生が中心となりながら、自分たちの視点で、「新しい東京の地図」をつくるという演習の講義を行っている。

東京を歩けば、個々の場所の独自性が実に多様であることがわかる。しかしながら、自分自身が物を見て判断するための「モノサシ」を各自が持っていいなければ、何を見て、どのように評価するのかがわからない。この講義では、東京をテーマに、自分自身が興味を持ったまちや建築、地域、空間を選び出し、その特徴を読み解いて、それをマップ化することにより、その「モノサシ」を各自が身に着けることを目的としている。同時に、東京のさまざまな地域の多様な資産を掘り起こし、そこに光を当てて価値付けて提示する作業でもある。作品の詳細は当センターのホームページをご覧いただきたい。(高村雅彦)

講義「フィールドワーク」

本講義は、学生を中心とする学内のブランディング事業、つまりインナーブランディングの活動である。デザイン工学部建築学科では、学部 3 年生に演習講義名「フィールドワーク(建築)」を設けている。学生たちが主体的に東京のまちに出て、おもしろそうなもの、価値のありそうなものを見つけだし、実際のフィールドを通して都市や建築の歴史を考えていくのである。具体的には、地図やさまざまな史料を使いながら歴史的なまちの分析、あるいは住宅などの建物の実測調査と作図を行う、こうした作業を通じて、単に分析方法や実測の知識を身に付けるだけでなく、都市や建築の歴史的価値を見出し、その保存や再生がいかに創造的な行為であるかを理解することが目的となる。主に東京を取り上げたその詳細は当センターのホームページに公開している。(高村雅彦)

講義「都市史」

江戸東京研究センター(EToS)のインナーブランディングを推進するために、東京のまちを対象に、街区、敷地、建築レベルで、江戸から明治、現代に沿ってその空間の変化を各時代の地図から考察する講義「都市史」を設けた。今、歴史的な都市や建築の多様な対象にあって、現代都市との関係をいかに解読し再構築するかが求められている。本講義では、デザイン工学部の大学院生がアドバイザーとなって、興味のある場所を自分たちで設定する。建築と都市の歴史の相互関係を読み解く方法を身に付け、地図作業と実際のフィールドを方法として、それを図面化して特質を表現する過程と技術を習得しながら、東京の新たな姿を創造するための基盤となる作業である。作品の詳細は当センターのホームページをご覧いただきたい。(高村雅彦)

著書

著者名：岡村民夫（共著）
書　名：国際都市ジュネーヴの歴史　宗教・思想・政治・経済
出版社：昭和堂
発行年：2018 年 6 月

著者名：岡村民夫
書　名：立原道造　故郷を建てる詩人
出版社：水声社
発行年：2018 年 7 月

著者名：小林ふみ子
書　名：へんちくりん 江戸挿絵本
出版社：集英社インターナショナル
発行年：2019 年 2 月

著者名：陣内秀信監修　高村雅彦、北山恒、他（共著）
書　名：新・江戸東京研究　近代を相対化する都市の未来
出版社：法政大学出版局
発行年：2019 年 3 月

著者名：阵内秀信、刘东洋、郭屹民 译
書　名：东京的空间人类学
出版社：中国建筑工业出版社
発行年：2019 年 3 月

著者名：高村雅彦監修＋高村研究室
書　名：復元　江戸城能舞台と弘化勧進能
出版社：法政大学江戸東京研究センター
発行年：2019 年 3 月

著者名：高村雅彦・皆川典久監修
書　名：東京発掘プロジェクト　水辺編 I
出版社：法政大学江戸東京研究センター
発行年：2019 年 3 月

著者名：槇文彦、真壁智治、北山恒、他（共著）
書　名：アナザーユートピア
出版社：NTT 出版
発行年：2019 年 3 月

著者名：小林ふみ子　共著
書　名：〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典著者：長島弘明編
出版社：文学通信
発行年：2019 年 5 月

著者名：高村雅彦
書　名：決定版 清明上河図
出版社：国書刊行会
発行年：2019 年 7 月

著者名：陣内秀信・高村雅彦
書　名：建築史への挑戦　住居から都市、そしてテリトーリオへ
出版社：鹿島出版会
発行年：2019 年 4 月

著者名：渡辺真理、北山恒、陣内秀信、栗生はるか 他(共著)
書　名：江戸東京の都市組織に挑む
出版社：彰国社
発行年：2019 年 9 月

著者名：Giancarlo De Carlo and ILAUD. A moval frontier
書　名：陣内秀信共著(edited by P.Ceccarelli)
出版社：Fondazione OAMi Milano
発行年：2019 年 11 月

報告書

著者名　：田中優子
報告書名：生誕百年　廣末保の仕事
主　　体：法政大学国文学会
発行年月：2019 年 7 月

著者名　：山本理顕責任編集、北山恒、他（共著）
報告書名：都市美
主　　体：名古屋造形大学
発行年月：2019 年 8

論文

論文標題：地域と共に生きるー東京の銭湯
著　　者：栗生はるか
雑誌名　：建築雑誌　no.1718
発表年月：2018 年 12 月

論文標題：江戸東京の心臓部、中央区の醍醐味　本郷
著　　者：陣内秀信
雑誌名　：吉川弘文館　No.139
発表年月：2019 年 1 月

論文標題：詩人黄瀛の再評価　日本語文学のために
著　　者：岡村民夫
雑誌名　：言語と文化　第 16 号
発表年月：2019 年 1 月

論文標題：テリトーリオの概念について
著　　者：陣内秀信
雑誌名　：法政大学エコ地域デザイン研究センター2018 年度報告書　pp.54-57
発表年月：2019 年 2 月

論文標題：イーハトーブ地名学　宮沢賢治と地名
著　　者：岡村民夫
雑誌名　：地名の風土　第 13 号
発表年月：2019 年 3 月

論文標題：本人は８０年代以後のイタリア文化をいかに受容してきたかー都市の魅力とテリトーリオの豊かさの視点から
著　　者：陣内秀信
雑誌名　：日伊文化研究第 57 号 pp.2-14
発表年月：2019 年 3 月

論文標題：崖線から見る江戸東京の庭園に関する研究
著　　者：畠山望美・高村雅彦・内藤啓太
雑誌名　：2018 年度日本建築学会関東支部研究報告集
発表年月：2019 年 3 月

論文標題：奥州の狂歌人の季節感―模範を超えて雪を詠む
著　　者：小林ふみ子
雑誌名　：国際日本学
発表年月：2019 年 3 月

論文標題：和食文化に対する「食」と「温熱環境」に関する基礎的研究
著　　者：出口 清孝
雑誌名　：民俗建築(日本民俗建築学会)第 155 号
発表年月：2019 年 5 月

論文標題：東京のなかの銀座；都市文化の魅力のありか
著　　者：陣内秀信
雑誌名　：都市計画 Vol.68, No.4
発表年月：2019 年 7 月

論文標題：南六郷ハウス
著者：北山恒
雑誌名：新建築
発表年月：2019 年 8 月

論文標題：革命はすでに始まっている
著　　者：北山恒
雑誌名　：建築雑誌　no.1728
発表年月：2019 年 9 月

論文標題：なぜ水辺に都市が栄えるのか
著　　者：高村雅彦
雑誌名　：経済界　第 55 巻
発表年月：2019 年 11 月

論文標題：島原城下町を「水の聖地」から読み解く
著　　者：高村雅彦
雑誌名　：水の文化　第 63 号
発表年月：2019 年 11 月

査読付き論文

発表標題：近代における居住環境改良思想の満鉄住宅標準設計への影響
発表者名：包慕萍・高村雅彦
学会等名：東アジア都市史学会
発表場所：中国上海・上海社会科学院
発表年月：2019 年 6 月

発表標題：20 世紀東アジアの都市住宅-1950 年代上海における計画思想とその制度から読む他都市との比較-
発表者名：邵　帥
学会等名：東アジア都市史学会
発表場所：中国上海・上海社会科学院
発表年月：2019 年 6 月

発表標題：白川村の地形モデルを用いたＣＦＤ解析と合掌造り民家の温熱環境実測
発表者名：小川夕季・出口清孝・川久保俊・大風翼
学会等名：日本建築学会環境系論文集第 84 巻,第 763 号
発表年月：2019 年 9 月

学会発表

発表標題：上海における建国直後の計画思想とその制度 東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その 3
発表者名：邵帥・高村雅彦
学会等名：2019 年度日本建築学会大会（北陸）
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：大連沙河口からみる初期の満鉄標準住宅　東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その 4
発表者名：包慕萍・高村雅彦
学会等名：2019 年度日本建築学会大会（北陸）
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：ヴァナキュラー建築に施されたパッシブデザインの応用に関する研究(その 4) 定量的データに基づくヴァナキュラー建築の分布傾向と気候風土の関係の把握
発表者名：加藤圭・出口清孝・川久保俊・河野峻大
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み（その 1）研究目的と実測概要
発表者名：吉田功樹・川久保 俊・出口清孝・山下大樹・渡辺智也・岡埜紘子
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：赤外線サーモグラフィを用いた都心部における暑熱環境の実態把握の試み(その 2)建物及び地表面温度の 24 時間連続実測
発表者名：岡埜紘子・川久保 俊・出口清孝・吉田功樹・山下大樹・渡辺智也
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：数値流体解析を用いた外皮表面積の差異が集合住宅内の温熱環境に及ぼす影響の検
発表者名：荒田史朗・川久保 俊・出口清孝・山下大樹・和久井景太
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：全国を対象とした地域間健康格差の実態把握と要因分析
発表者名：松尾諒・出口清孝・川久保俊・加藤圭
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：自治体の HP 及び各種計画における SDGs 関連情報の盛り込み状況
発表者名：石川怜・川久保俊・出口清孝・茂手大貴・高瀬直也
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：室内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査（その 1）－皮膚水分量・経皮水分蒸散量の通年変化－
発表者名：大門俊介・川久保俊・出口清孝・星旦二・石田紗英
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：室内外の温湿度が皮膚水分量に与える影響に関する通年調査（その 2）－マルチレベル分析に基づく皮膚水分量に影響を与える要因の把握－
発表者名：石田紗英・川久保俊・出口清孝・星旦二・大門俊介
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：夏季の屋外における暑熱環境対策が心拍と脈拍に与える影響の検証
発表者名：渡辺智也・川久保 俊・出口清孝・吉田功樹・山下大樹・岡埜紘子
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：ホットスポット分析を用いた全国市町村別健康格差の時系列比較
発表者名：北田文也・出口清孝・川久保俊・松諒・加藤圭
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：暖房方式とその使用方法の違いが人体エクセルギー消費速さに及ぼす影響の CFD 解析による可視化
発表者名：和久井景太・川久保 俊・出口清孝・宿谷昌則・山下大樹
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：脱近代あるいは非都市
発表者名：北山恒
学会等名：2019 年度日本建築学会大会
発表場所：金沢工業大学
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：港湾と都市の連携 の観点から見たみなとオアシスの機能配置と運営
発表者名：橋本航征・福井恒明
学会等名：第 60 回土木計画学研究発表会
発表場所：富山大学
発表年月：2019 年 11 月

発表標題：河川堤防の形態とアクセス整備に着目した水辺アプローチの多様性
発表者名：堀越義人・福井恒明
学会等名：第 60 回土木計画学研究発表会
発表場所：富山大学
発表年月：2019 年 11 月

発表標題：明治以降の風景写真に見る都市風景の変化とその要因
発表者名：八杉遥・荻原知子・福井恒明
学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会
発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）
発表年月：2019 年 12 月

発表標題：水害常襲地の土地利用変遷と都市計画ー倉敷市真備地区を対象に
発表者名：久保拓巳・福井恒明
学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会
発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）
発表年月：2019 年 12 月

発表標題：市民参加の地域活動における市民の意向－外濠市民塾の活動を対象に
発表者名：田中咲・福井恒明
学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会
発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）
発表年月：2019 年 12 月

発表標題：明治以降の新聞記事に見られる広場等公共空間の変遷
発表者名：堀川萌・荻原知子・福井恒明
学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会
発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）
発表年月：2019 年 12 月

発表標題：九段・神保町周辺の地域史資料アーカイブ化とその活用
発表者名：田邉喬太・福井恒明
学会等名：第 15 回景観・デザイン研究発表会
発表場所：日本大学（駿河台キャンパス）
発表年月：2019 年 12 月

招待講演・国際学会

発表標題：場所の記憶を歩く～日常風景の観光化～
発表者名：栗生はるか
学会等名：日本観光研究学会
発表場所：跡見女子大学
発表年月：2018 年 12 月

発表標題：江戸はネットワーク再論
発表者名：田中優子
学会等名：江戸東京研究センター
発表場所：佐原市
発表年月：2019 年 3 月

発表標題：奪われる自由と創造される空間
発表者名：高村雅彦
学会等名：法政大学江戸東京研究センターワークショップ「テクノロジーと東京」
発表場所：法政大学
発表年月：2019 年 3 月

発表標題：自然素材で「始原の小屋」をつくる
発表者名：高村雅彦他
学会等名：江戸東京たてもの園「たてもの園フェスティバル」
発表場所：江戸東京たてもの園
発表年月：2019 年 3 月

発表標題：Città e territori ereditati
発表者名：Hidenobu Jinnai
学会等名：Principi e metodi della valorizzazione in Giappone e in Italia、ANCSA アルガン賞授与式
発表場所：イタリア・グッビオ市
発表年月：2019 年 4 月

発表標題：古代地形から読む神田明神とその景観
発表者名：高村雅彦
学会等名：江戸東京文化講座
発表場所：神田明神
発表年月：2019 年 5 月

発表標題：中国大連沙河口地区の再生計画
発表者名：高村雅彦・加藤智也他
学会等名：大連理工大学建校 70 周年記念ワークショップ「大連歴史街区の更新設計」
発表場所：大連理工大学
発表年月：2019 年 5 月

発表標題：廣末保の仕事
発表者名：田中優子
学会等名：法政大学国文学会
発表場所：法政大学
発表年月：2019 年 7 月

発表標題：水都東京の再考～建築からテリトーリオまで～
発表者名：陣内秀信
学会等名：全国まちづくり会議 2019in 東京
日本都市計画家協会
発表場所：竹中工務店東京本社
発表年月：2019 年 9 月

発表標題：徹底解剖！万里の長城
発表者名：監修：高村雅彦・邵帥
学会等名：番組名：地球ドラマチック
発表場所：放送局：ＮＨＫ Ｅテレ
発表年月：2019 年 11 月

発表標題：歴史から見る多様なネットワーク
発表者名：田中優子
学会等名：朝日新聞社
発表場所：法政大学
発表年月：2019 年 11 月

発表標題：1980 年代の<石川淳>と<江戸>
発表者名：田中優子
学会等名：日本女子大学文学部
発表場所：日本女子大学
発表年月：2019 年 12 月

研究成果に対して書かれた書評

評　者　名　：菅啓次郎
媒　　体：日本経済新聞
書評掲載年月：2018 年 8 月
著　書　名　：立原道造 故郷を建てる詩人(水声社 2018 年 7 月)
著　者　名　：岡村民夫

評　者　名　：篠原資明
媒　　体：東京新聞・中日新聞
書評掲載年月：2018 年 9 月
著　書　名　：立原道造 故郷を建てる詩人(水声社 2018 年 7 月)
著　者　名　：岡村民夫

評　者　名　：串田純一
媒　　体：表彰
書評掲載年月：2019 年 4 月
著　書　名　：立原道造 故郷を建てる詩人(水声社 2018 年 7 月)
著　者　名　：岡村民夫

評　者　名　：成毛眞
媒体/掲載年月：朝日新聞 2019 年 2 月
日本経済新聞 2019 年 3 月
週刊新潮 2019 年 4 月
著　書　名　：へんちくりん 江戸挿絵本
（集英社インターナショナル 2019 年 2 月）
著　者　名　：小林ふみ子

その他

江戸東京の怪談文化を考える
横山泰子
江戸歴史講座第６１回
日比谷図書文化館

せんとうとまち(栗生はるか,金谷匡高他)
滝野川稲荷湯
昭和 5 年建築の稲荷湯を地域の拠点として再生するためワールドモニュメント財団へ申請を行い、選定される。

小池百合子東京都知事あて提言「外濠・日本橋川の水質浄化と玉川上水・分水網の保全再生について」,
法政大学総長 田中優子、東京理科大学学長 松本洋一郎、中央大学学長 福原紀彦、2019 年 9 月 17 日手交